
月下の王城

香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の王城

【Nコード】

N1232G

【作者名】

香住

【あらすじ】

三日月の夜、決起開始——悪政を正すために立ち上がった者たちのその生命は、その意志は、次なる世代へと紡がれていく……彼らの選択を無駄な徒労と思うだろうか？<剣と魔法の異世界ファンタジー>★国内図MAP公開★

第一話：プロローグ（前書き）

このお話は、あるストーリーのスピノフとして以前書いたものです。

非常に長い上に、三人称での本格的長編の執筆は初めてでかなりシリアスな内容ですので読みにくいかもしれませんが：

私が「どんなものを書くのか」がお伝えできればと思い、こちらに転載することになりました。

どこかでお読みいただいた方、すみません（笑）

第一話：プロローグ

今から……そう、三十三年前のこと。エストレージャ王国は病に臥した王を支える保守派と、その息子である王子の即位を勧める革新派の二派に別れて対立していた。

対立といってもさほど大きな騒ぎになるものではない。お互いが自らの推す案を躍起になって通そうとしているだけの子供の喧嘩レベルだ。渦中の王が伏せるベッドにその話題は持ち込まれはしなかったし、王子はそのときまったく政に^{まづりごと}関心がなかった。当然だ、まだ齢十六の少年ならば仕方あるまい。

同じ年、ある貴族の娘が近衛騎士団へ初の女性入隊を成し遂げた。ローレンシア嬢は十八歳。

父ウォーディート卿はかつて近衛騎士副団長として活躍した腕の立つ男であり、彼の子は親族のみならず王族までもが期待を膨らませ待ち焦がれていた。しかし産まれたのは女で、その後十年間、長男が生まれるまでローレンシアはあからさまな落胆と溜息の中で育ったのである。

それ故か、随分と男勝りで頼もしい女性騎士となった。当時のエストレージャ王国近衛騎士団への入団は剣の腕はもちろん血筋までもが厳しくチェックされる難関であったので、彼女の入隊は多くの話題を呼び、その翌年から僅かではあるが女性兵士、女性騎士が続々と誕生していく先鋒となったのだ。

翌年、エストレージャ国王が崩御した。

革新派は深夜に戴冠の儀を終え、保守派の反対むなしく王子は即日、正式に王となった。ロサード嬢は十七歳のときで

ある。

当然、最初から政がうまくいくはずもない。若き王は父の腹心たちを頼った。彼らは強欲で口ばかりが巧い老人期に差し掛かった男たちで、息子よりも年下の少年王を騙すのは簡単だった。

しかし新王は酷く頭の良い少年だった。その興味を政に向ければ自分の置かれている立場、利用されている状況、現在の王宮の財政などは手に取るようにわかった。そして彼は利用したのだ、自らの地位と年齢と未熟さを。否、彼はもはや未熟ではなかった。しかしそれを決して表に出そうとはせず、未熟で幼い少年王を装った。年齢を理由に軽んじられることも承知していた。その上で彼は、見事操られている振りをして狡猾な仮面を隠していたのだ。

自分が矢面に立たぬように仕向けた外交をはじめとし、国内の富豪たちへは好意的な言葉を巧みに操り、若きロサード王は周囲を完全に欺きながらその欲を満たしていた。

それと反比例して国内が荒んでいくのは必至だろう。貧富の差は激しくなり、力の強い者が弱い者を足蹴にする。小さな村や貧しい村は次々と潰され豊かな村には重い税を課し、反論があれば力でねじ伏せる――正義感に駆られた若者たちは次々に国王軍兵士に志願し国を立て直すために命を賭する道を選び無残に散っていく――そんな繰り返しに気づいた者たちが集まり始めたのが、即位から二年後のことだった。

第二話：貫くべき意志

酒の席で上官の愚痴を言うのはもうお約束のことだろう。しかしその相手が現国王だとしたら？

しかもその愚痴は極当然のことで、責められるべきは当の上官――国王であつたとしたら？

しかしこのエストレージャの乱れた国政の中、真正面から王を指差せる者はない。それを王自身がよくわかつているからこそ――そのツケは国民へと降りかかる。払えない火の粉は甘んじて受け、その身が丸焦げになろうともすべてロサード王のため。

そんな『常識』に異議を唱える者がいた。彼らは場末の酒場のいつもの隅っこの丸テーブルでお互いの意思を確認し合ったばかりだった。

「――良いのか、本当に？」

「くどい」

ガタイのいい、銀髪の男が背を丸めながらカップを置き、右隣の女に向かって問えば、女の方は高い位置でまとめた金に近い茶髪をさらりと振って端的に答えた。

どちらかというとなりの男の方が弱気だ。カップを手にしたままジロリと灰青の視線を女へと向ける。

「しかし、父上ががっかりなさるぞ」

「……昔から父上には弱いね、おまえは」

くす、と女が笑うと冷ややかな印象の表情がやわらかく崩れる。

男はチツと舌打ちをすると大きく深呼吸をした。

「しょうがねえだろう、オレのオヤジ代わりみたいなものだ」

「馬鹿、そんなこと言ったら小父様が淋しがる」

沈黙が流れる。彼らが馳せた思いの先が自分と、それから相手の両親であることがお互いわかっていた。彼らを裏切ることになる――それだけが、二人を最後まで躊躇させた原因だった。

「ロージー……いや、ローレンシア」

男が女の愛称を呼び、そしてフルネームに訂正する。黙ったまま男はローレンシアの前に右手を出した。彼女は弓形に唇の両端を上げて少し首を傾げ、細い黒の瞳でまっすぐ男を見返してその手を取る。

「これからよろしく、ヤン」

「死ぬまで、な」

ニヤリとヤンが灰青の瞳を片方瞑り、おどけた口調で返した。しかしそれが強がりや誇張でないことは、握手する手の強さからローレンシアに伝わっていた。

ヤン＝メイフィールドはローレンシアの隣人で、幼い頃から一緒に兄妹のように育った。後にメイフィールド家が没落し、住まいをオフォスの隅の方に移してからも彼らの友好は続いていた。ヤンが騎士を目指していることを知ったウォーディート卿は彼の入隊時に非常に骨を折っていた――その頃メイフィールド家は決して身分の良い家とは言えず、卿の口添えがなければヤンは近衛兵にはなれなかったことだろう。

かつて騎士副団長を務めた男の娘と、そしてその口添えがあった騎士が揃って国王へ反旗を翻すというのは、他のどの騎士のそれよりも重い意味を持っていただろう。当然、若い二人がもっとも重くそれを受け止めていた。

第三話：すべてを捨てても構わぬか

まず二人が始めたことは、近衛騎士の中から自分たちと同じ思いを抱いている者を探すことから始まった。しかし安易な決意では駄目だ。今の地位をすべて蹴り、一生を追われる身となっても構わないと思えるだけ強い意志を持った者でなければならぬ。

彼らが慎重に時間をかけて調べた結果、ここ二週間休養をしている兵士の話を耳にした。その男のいた小隊は一ヶ月前、ロサード王の命にてティラードにある小さな町を焼き討ちにした。その町の主が王に楯突いたとの噂が元だった。

「で、それきり奴は出て来やしねえんでさ。あんまり休めば陛下の心象も悪いってーのに」

溜息をついて同じ小隊の男がそう言い、じゃ、と片手を挙げると鍛錬場へと駆けて行く。その後姿を見つめながらヤンは肩を竦めて見せる。

「無理だな、その程度で神経やられるようなヤワイのはいらねえよ」

「まあ、話を聞いてみようじゃないか。――行ってみよう」

言い出したら聞かねえからな、とヤンはもう一度肩を竦めた。幼い頃からそうだった。ローレンシアは自分の目で見て納得したことしか信じない。だからこそ、噂だけで町を焼き討ちにする現王に反発を抱くのだ。

教えられた男の部屋はパン屋の二階の一番奥の部屋だった。そこまで案内してくれたパン屋の子供に礼を言って小銭をやると、ローレンシアはノックをする。

数回繰り返した後、やっと扉がほんの少しだけ、開いた。

「誰だ」

「エストレージャ国王軍近衛騎士、ローレンシア＝ウォーデイド」

「……近衛騎士……ウォーデイド？」

扉の向こうで男がはっとしてその名前を繰り返す。面識はなかったが、さすがにローレンシアの名前は知っているらしい。

「……何用だ」

「先日の任務について聞きたいことがある。入れてくれぬか」

しばらくの沈黙の後、扉が開かれた。暗い部屋の中、憔悴した金髪の男の姿が見える。

「オレはヤンだ、同じく近衛兵」

「……テリー＝ホワイトだ」

男はあっさりと名前だけ名乗り、奥の椅子を二人に勧める。部屋が薄暗いのはカーテンがしっかりと引かれているせいだった。窓の外の誰かの視線を気にせずにいるいか、とローレンシアは内心苦笑して椅子にかける。それにヤンも倣った。

茶器の用意をする気配も無く、男は疲れたように歩いてくるとベッドに腰掛ける。腿に両肘をつき、頭を抱えるようにして呻く。

「そろそろ通告が来る頃か、とは……思っていた」

通告とは、ずっと休んでいる男――テリーへの処罰のことだろう。見たところ怪我や病気ではないようだし、確かにそろそろ切られる頃だ、とローレンシアは頷く。

「あたしたちはその伝令じゃない。むしろ出来れば、ここへ来たことは内密に願いたい」

意外な言葉に、テリーが頭を上げてぼんやりとローレンシアを見つめる。

「お前さんを責めに来たわけじゃねえってことだ」

ヤンの補足に頷いたローレンシアが、真顔で頷くと顎を引いた。その真剣な眼差しにテリーはぴくりと緊張する。

ウォーデイドといえば元副団長を父に持つ女だ、とテリーは記憶を辿る。ああそういうえば、隣の男はその古い友人でこれもまた元副団長に可愛がられているとか。

「率直に聞こう。――先日の任務についてテリー＝ホワイト、おま

えの意見を聞きたい」

「意見……？」

テリーが目を見開いて鸚鵡返しに訊ねる。それもそうだろう、国王軍に従軍してから自分の意見を聞かれたことなど無かった——この国の兵士にとって必要なのは従順さで、意見ではない。

「そうだ。あの任務でお前がどう思ったか、を聞きたい。もちろん他言はしない」

ローレンシアは重ねて念を押す。

第四話：剣を振るうは誰が為

「……あの町は、僕が生まれ育った町、だ」

テリーが押し殺した声でぽつりとそう言ったのは、それから随分の沈黙のあとだった。ローレンシアはぴくりとその眉を上げる。ヤンもあからさまに眉を顰めた。

「町の人間は皆良い人たちばかりだった。ロサード王の命は、町が産出する鉱石の……八十パーセントを上納しろという、もので……それに苦しんでいたのも、僕は、知って……いたんだ」

喉から絞り出すような声でテリーは続けた。あれ以来ずっと、誰にも言えなかったことだ。ひとり悩み苦しみ、己が下した決断といくつかの奪った命とが何度も何度も彼自身を責めつづけていた。

「家族は」

ローレンシアの短い問いに、テリーは力なく頷いた。

「父と母と、それから、小さな弟がいた。——彼らに何の罪がある？ 自分たちの生活を守るためだったのに……何故それが、あのような事に……！」

家族のことを話し始めると、テリーの中の激情は止められなかった。鉱石を八十パーセントも持っていてはあの町の民たちの生活が成り立たないのをよく知っていた。植物の育ちにくい瘦せた土地でずっと苦勞して生きてきた町の民はいまや、土から生まれる輝く石を売ることではしか生きられなかった。そのほとんどを王に持っていていかれては——その生活は崩壊する。だからこそあの町の民たちは拒んだのに。

両手で顔を覆って嗚咽を堪えるテリーを前に、ヤンとローレンシアは目配せを交わす。

「ひとつ聞きたいことがある」

まだ顔を覆ったままのテリーに訊ねるローレンシアの声は、いさ

さか柔らかかった。故郷と温かい家族を失った目の前の男の傷がまるで目に見えるようで、ローレンシアはそつと続けた。

「一度しか言わないから、よく聞いてほしい。――国王反乱軍に手を貸す気はあるか？」

ぴん、とその場の空気が張り詰めたようだった。テリーは今自分の耳が聞いたことを咀嚼し終えるまでたっぷり三十秒、かかった。顔を上げる。

まっすぐに自分を見つめるローレンシアの瞳には強い意志が浮かんでいる。その隣で足を組んでいるヤンもそうだ。つまり、今言ったことは本気である、証。ごくりとテリーの喉が鳴る。

目の前の二人は近衛兵だ。身分も腕も保証され、華やかにマントを翻すような立場の者だ。そうだ、ローレンシアは、とさっき思い出した事実を再度感じてテリーは瞬きを繰り返す。彼女の父は、元近衛騎士団副隊長――

「理由を、聞かせてくれないか」

テリーは即答を避けてそう聞き返した。彼の美しい緑の瞳が今は生氣を取り戻し、意志の輝きをもってローレンシアを見返していた。さっきの、打ちひしがれた男とはまったく別人のようなその強さに、ヤンは一瞬目を瞠る。

「おまえと変わらない。己の剣は民のために振るいたいだけだ」

細い黒の瞳が緑の瞳を見返した。揺るぎない強さはテリーにそれ以上の不安を抱かせることはなく、彼女が父の重圧にも耐える覚悟であることも伝わった。となれば、それ以上答えを引き伸ばす理由はない。

テリーの右手がすいと、ローレンシアの前に差し出される。

「共に、闘わせてくれ」

第五話：事故死の計算

その一週間後、テリーに近衛兵解雇通知が届いた。あれからヤンとローレンシアとで相談した結果、そのように持っていた方が良いだろうと思われたからだ。

そして三人でひそかに同志を集めはじめ、その数が二十人に達しようかといったある日、ヤンとローレンシアはひとつの計画を実行に移した。

オフォス南の海岸線を警備しているときだった。ローレンシアが乗っていた馬が暴走し、それを止めようとヤンが飛び乗った。しかし馬はそのまま断崖の上を駆け続け、やっとな小隊の仲間が追いついたときにはその背にローレンシアもヤンもない――すぐ傍は断崖絶壁、落ちたら命はおろか、遺体さえも上がらないだろうと言われている場所だった。当然、二人は事故死として扱われた。

当初、その計画にヤンは渋った。騙すようなやり方はあとで怒りを招くだけだ、と反発した。

「それでいい」

「何……？」

「それでいいんだ。騙されれば皆頭に来るだろう。刃を向けるのに躊躇しなくなる」

その言葉でヤンもテリーも、彼女が何を考えているかを正確に理解した。反乱軍がかつての仲間であるかわかれば当然、振るう剣に迷いが生じる。敵対すべき相手なのに割り切れずに思い悩む。それならば最初から憎まれ役として登場しよう、と――そういう了見な

のだ。

ローレンシアの意図を理解したヤンはそれ以上反対はせず、風の強いある日にそれは実行され、身を隠した二人は計画どおり、エンテの北にあるアジトへと向かった。

とはいうものの、実はそんなにうまくはいかなかったのだ。暴れる馬から飛び降りる際、ローレンシアの右足に深い裂傷が出来た。彼女は最初は黙っていたものの、そんな足でエンテまで駆けられるはずがない。すぐにヤンが気づいたが、そのときには腫れ上がってもう一步も歩けないほどだった。

近くには止めないという条件でローレンシアが馬車を使うことを了承したが、降りてから先はヤンが負ぶう以外はない。ぶつぶつ文句を言うヤンの頭をローレンシアがぱしつと引叩く。

「痛えっつーの、加減しろよ、怪我人が！」

「だったら黙って運べ」

「ったく、口に怪我すりゃ良かったのによー」

「何か言ったか、ヤン？」

アジトの扉をいつもどおりの回数ノックするが、いるはずのテリ―が出てこない。

今日計画を実行することは確認済みだ。速やかにアジトに戻って来い、とも彼は言っていた。それなのに、何故――？

「仕方ない、どこか安宿を探そう」

ヤンの背中ではローレンシアがそう呟いた。宿は足がつきやすい。事故を装ったとはいえいつ何時バレるかわからないが、仕方ない。背中のローレンシアにわかるように大袈裟に溜息をつく、ヤンは仕方なく歩き出した。

――と、そこへバタバタと足音。そしてバン、と扉が大きく開かれる。咄嗟にヤンが背中のローレンシアを庇うように振り向き、彼女を左手で支えたまま右だけで腰に帯びていた剣を抜く。ヤンの得

物は一般的な剣よりも長く、その分重く作られていた。

「ご——ごめん！」

しかし扉を開けたのは紛れもなくテリー。肩で呼吸を整えているところを見ると、どうやら屋根裏部屋にいたらしい、とローレンシアは冷静に分析していた。

彼らのアジトは古い酒屋の裏手にあり、一見はつぶれたバーにか見えない。屋根裏にあった収納場所を補強して、万が一のための隠し場所を作ったのだ。

「さあ早く！……ロージー、足をやったのか？」

「ああ、おかげさまでね。おいヤン、急げ」

「まったく、どういつもこいつも……」

急かす人間が二人に増え、ヤンは不愉快そうな顔を隠さない。それでも早足にアジトへ入ると、古びたソファに彼女を下ろした。その前にひざまづいてローレンシアの傷を見ていたテリーが不安げに零す。

「酷く腫れてる……」

そう呟いて、応急処置をしようと包帯の籠を取りに立ち上がったところで、屋根裏がガタリと音を立てた。テリーの動作がぴたりと止まり、当然、ヤンとローレンシアの表情には緊張が走る。

「誰かいるのか」

低い声でヤンが訊ねる。キッと睨まれたテリーは一瞬戸惑い、そして次にローレンシアの厳しいまなざしに睨みつけられて白状した。

第六話：咎人救済の結果

「——コンの、大馬鹿野郎！　そんな女拾ってきてどーするつもりだ！」

あくまでも上に聞こえないように、と配慮しながらも怒鳴りつけるヤンの前で、ローレンシアも難しい顔をしていた。

テリーが言うには、午前中に街境の様子を窺いに行ったところ、オフォスに入る少し手前で休憩中の国王軍の小隊に出くわしたらしい。驚いて身を潜めていると、彼らは首と手首を繋がれた女性を連れており、その髪を掴んで汚い言葉を浴びせたり、つないだ紐をわざと引いて転ばせたりと酷い扱いをしていたという。通り過ぎる街人たちも眉をひそめはするものの、助けようとするものは当然のように現れなかった。

さすがに正面切って戦えば無理がある。こっそりと裏を回って彼女が繋がれた紐を切り、隙を見て一緒に逃げてきたのだという。

「仕方ないじゃないか、見捨てていくわけにいくまい！」

テリーの反論に、ヤンがウツと言葉に詰まる。その情景は想像し易く、また、もしも自分がそこに遭遇していたならば完璧に沸騰していただろうことは想像に難くない。テリーのしたようにこっそり逃すよりもそこで大立ち回りをしていた可能性も否定できなかった。「……そりゃ、そうだが……わざわざこんなときに」

はあ、と溜息をついてヤンがソファに身体をうめた。難しい表情で黙っていたローレンシアがそこでふと、口を開く。

「咎人、か……」

ローレンシアは隣国からこっそりと国境を越えてきた者がいるという噂を数日前に噂を聞いたことがあった。そしてそこへ小隊が派遣されたこと、おとなしく戻った者は放免したが、抵抗した者はその場で処刑されたということも。そのためか、差し向けられた小隊

に荒っぽい気性の者たちが選ばれていたのにも気づいていた。

テリーは少し躊躇する様子を見せたがくつと顎を引いて頷く。

「そう、言っていた。しかし事實はわからない、皆にそう言いふらしていただけかもしれない」

「そうか。――怪我は」

「……え？」

「その女性の怪我はどうなんだ？」

「あー……」

重ねて訊ねたローレンシアの問いに、テリーがちよつと言い辛そうに言葉を濁す。しかし口元に微かに笑みが浮かんでいることを考えれば、さほど重くはないのだろう。テリーから視線を外し、ローレンシアはほっと息をつく。

「言いたくなければ構わないが、ここは危険だ」

「ローレンシア、頼みがあるんだ」

被せるようにテリーが言い、ごくりと唾を飲む。その様子にヤンは嫌な予感を覚えてぴくりと頬を引きつらせ、言われる前に口を開いた。

「まさか、仲間にしてえなんて言うつもりじゃねえだろうな？」

ギロリと睨むも、その倍くらいの強さで見返される。そして予想通りの言葉がテリーの口から漏れた。

「そうだ、彼女を仲間にした」

第七話：魔法の力

しばしの沈黙を破ったのは、今度はローレンシアだった。

「テリー、少し落ち着け」

「落ち着いている！ 何も考えていないわけじゃないんだ、僕は――」

ムキになるのが落ち着いてない証拠じゃねえか、と喉元まで出かかったが、ヤンはそれを口にするのを止めておいた。

「わかった。とりあえず会ってみよう」

「……え？」

意外にも簡単に腰を浮かせるローレンシアに、逆にテリーのほうが僅かに躊躇する。

「おい、止めとけ」

さすがにヤンが口を挟んだ。しかし彼の意図は別にあり、彼女が怪我をした足をおして屋根裏部屋に上がるのを止めようと思ったのだった。しかし女は怪我をしているだろう。向こうが降りてくるわけにもいくまい、それなら自分が会ってその意図を確かめればいい。しかしその静止をローレンシアが聞くはずもなく、ひよこひよこ歩きながら上へ向かう梯子に手をかける。そうだった、彼女は幼い頃からずっと、自分が思ったことは実行に移さなければ気がすまない――オレはそいつをすっかり忘れてた、とヤンは気づかれないように溜息をつく。

「待ってくれ、ローレンシア」

テリーが彼女の肩に手をかけてそれを止め、そして逡巡のあとに言った。

「彼女に降りてきてもらう。君のその足じゃ、上がっても降りられないよ」

くすりと笑って言った口調は、やっといつものテリーらしい快活

なものに変わっていて、ローレンシアは素直にそれを受けることにする。

テリーが屋根裏に上がり、ぼそぼそと会話らしき声が聞こえたあと、梯子がみしりと音を立て、上から誰かが降りてくるのがわかった。裸足が見え、それからぶかぶかのズボンにシャツ——テリーの服を貸したのだろう、彼はどちらかといえば男性としては小柄な方だが、その服でもまだあまるほど、女は痩せてしまっていた。美しく豊かな金の髪がまだ湿っている。

「あ……お邪魔、してます」

ヤンとローレンシアを見て彼女はぺこりと頭を下げる。確かに怪我は無いようで、ローレンシアは内心ほっとした。

あとからテリーが降りてきて、まずは彼女の名前を継げる。

「リンティア、っていうんだ」

「はじめまして」

もう一度ぺこりと頭を下げる。ぬけるように白い肌にそばかすが散っていて、随分とかわいらしい少女のような女性だった。

「ローレンシアだ。こっちはヤン。怪我がなくてよかった」

珍しく微笑みを浮かべながらローレンシアが差し出した右手を軽く握りながら、リンティアは「え……」と僅かに驚いた顔をする。そしてふっとその表情を緩めた。

「あの、わたし、魔法使いなんです」

「——は？」

唐突なリンティアの発言に、ヤンとローレンシアの声が同じ音をとる。そしてまじまじと目の前の少女を見つめた。会話がどう繋がったかよくわからなかったからなのだが、テリーが狼狽して瞬きの数が多くなる。

「あ……えっと、あの……」

「魔法の力があるんです」

テリーが言葉を探している間に、リンティアがさらりともう一度、重ねる。ヤンとローレンシアはやはり目を丸くしたままだ。

「ま……ほう？」

「ええ。エストレージャには、ないんですか……？」

ヤンが呟いた言葉に急に心配そうに青い瞳を曇らせると、リンティアは不安げにテリーを見た。

「いやあの、エストレージャにもあるよ！　——えーとつまり、リンティアは魔法が使えるんだ」

ごく稀に魔法を持った者がいるということは知っていたし、ヤンもローレンシアも今までに一度も会ったことがないわけではない。が、突然飛んだ話についていくことが出来ずに二人は顔を見合わせた。じっと自分を見つめているローレンシアの瞳に、リンティアはにっこりと微笑みかける。

「わたしの魔法は『治癒』——傷を治すことが出来る力を持っています」

そして微笑むとローレンシアの足元に跪き、その右足の傷に掌を掲げる。三人の視線が集中する中でリンティアの掌がほわりと光り、その手がかざされたローレンシアの右足の傷もその輝きに包まれる。しばらく三人はその輝きに見惚れていたが、ふとローレンシアが気付くとリンティアの額はびっしりと汗をかいている。

「リン——」

「もう少し」

名を呼ぼうとした声を、リンティアが鋭い声で遮った。

ヤンはその輝きに見入っていた。こんなに近くで魔法を見るのは初めてで、最初こそ驚きが大きかったがその光がやけに温かいのを感じていた。

第八話：彼女が望む居場所とは

「これでいいわ」

リンティアがほうつと息をついてかざすのを止めると、光がすうっと収束する。それに見入っていた三人は、リンティアの身体がゆらりと傾ぐのに気付くのが少し、遅れた。

「……あ！」

慌ててテリーがその身体を支える。その腕の中でリンティアがかすかに目を開けて「だいじょうぶ」と小さな声で呟いた。

それに反して、ローレンシアの傷はすっかり治っていた。不思議な魔法の力に彼女とヤンは瞠目して顔を見合わせる。その上リンティアが急にぐったりとしてしまったのにも驚きを隠せず、ヤンは彼女に手を伸ばしながらそつと訊ねた。

「まだ、傷が……？」

「……いいえ」

リンティアが小さく首を振る。そしてテリーの手を借りてしっかりと立つと大きく肩で呼吸を整える。テリーは彼女から手を離ず、肩をそつと支えたままだ。

「魔法を使うと、呼吸が、苦しくなるの……大丈夫、休めば、良くなるから」

「テリー、彼女をベッドに」

「……ああ、うん」

ローレンシアの指示に、テリーが華奢な身体を抱きかかえて奥の寝室へと消えた。その後ろ姿を見送ってヤンが頭を掻きながらふうと感嘆の息をつく。

「……初めて見たな」

「ああ、あたしもだ。――すっかり治ってる」

さっきまで腫れていた右足首に触れながら、ローレンシアも感心したように言った。ヤンも腫れの引いた足を興味深げに眺めていた

が、ふと寝室の閉じた扉を見つめてちらりとローレンシアを見やる。

「ンで、どーする？」

「……彼女がどうしたいのかを聞こう。話はそれからだ」

「なんとなく返事が想像つくけどな……」

ヤンが軽く顎でドアを指す。その意図はローレンシアにも伝わっていて彼女はくすりと笑みを浮かべた。二人が人の機知に富んでいるだけではなく、テリーの様子はそれだけわかり易くもあった。

「戦いの場に赴くだけが反乱軍というわけでもない。あの力は貴重だ」

「でもアレじゃ、頻繁に使うわけにいかねえだろう」

ただでさえ線が細い印象のリンティア。しかも魔法を使ったときの苦しそうな表情を思い出すと、彼女にその力を使うことを強制するのは気が進まない。それはローレンシアも同感のようで僅かに頷いた。

さて、どうするか——ローレンシアはちらりと寝室の扉を眺めて考える。テリーが彼女を気に入っているのはわかったし、彼女がもう帰る場所がないのも事実だ。助けてもらったテリーに恩義を——もしかしたらそれ以上の感情を抱いているのは明白だったし、それならばここにいたいと考えるのは当然だろう。

しかしここは反政府組織であって共同生活ではない。治癒魔法を持っているとはいえリンティアは見るからに戦いとは無縁の女性だった。

大きく深呼吸をして思考から抜け出し、ローレンシアは椅子に腰掛けながらヤンに言う。

「リンティアが落ち着いたら、二人の話を聞こう」

「二人？」

鸚鵡返しに問うヤンに、ローレンシアは「ああ」とだけ返事を返す。

「二人、ねえ……」

ヤンが呟きながらちらりと寝室の扉を見て肩を竦めた。

二人の回答は予想通りだった。ヤンとローレンシアはそれ以上反
対せず、ただリンティアに念押しをするに留めた。

「本当にいいのだな？」

リンティアが力強くこつくりと頷き、その手にテリーがそつと自
分の掌を重ねる。目を合わせて微笑み合う姿は幸福そうな恋人同士
そのもので、ローレンシアが苦笑を漏らすほどだった。

第九話…定まった焦点

反乱軍『アンシアン』の立ち上げメンバーはヤンとローレンシア、それからテリーの三人だったが、半年ほどでそのメンバーは五十人ほどに増えた。最前線で城に乗り込みたいと意気込む者から、非戦闘員でも気持ちだけ参加したい、という者までさまざまだ。ローレンシアがいるせいか女性の戦闘員も数人いる。ヤンがリーダーとしてその采配を振るしつつ、テリーが予想外に人同志の折衝に向いていた。

そして立ち上げから約一年後、ある日付に焦点が置かれた。反乱軍『アンシアン』の決起である。

あまり人を増やすだけでも無意味であるという考えに一理あるとして、血気盛んな一部のメンバーの強硬な声に応えるかたちでその日付は縁取られた。目的が定まると、今まで漠然としていた思いは炎を立てる。ちりちりと胸を内側から焦がすような高揚感が高まり、戦いに赴く者たちの表情は一律に厳しく引き締まっていた。

王座の間へ向かう特攻チームが四人、ヤンとローレンシアと、それから腕の立つ男が二人選ばれた。そして城まで特攻チームをガードをする予備メンバーのリーダーにテリーが置かれ、非戦闘員のメンバーは国内の各街に散らばった幾つかのアジトへそれぞれ潜む予定だった。

予想外にリンティアを説得するのに手間取ったのはローレンシアだ。己の非力さを知っている彼女なら指示どおりおとなしく別アジトへと行くだろうと考えていたのが見事にひっくり返される。

「嫌です」

リンティアは背筋を伸ばしてじっとローレンシアを見つめる。透き通るように青い瞳がキツとつり上がっていて、いつもの柔らかな

彼女とは違う印象を与える。

「嫌……と言われてもな」

苦笑に逃げ、ローレンシアは思案する。テリーの傍にいたいのだろう。それはよくわかるが、まさか予備メンバーに入れるわけにいかない。誰かを守りながらでは戦力は半減以下だ。

「わたしのこの力を、役立てたいの。……お願い、ロージー」

確かに彼女の言うとおり、治癒の力は戦場にあってほしいものではある。しかしそのただけにリンティアを城へと連れて行くのはひどく難しいことに思えた。

「わかってくれないか。おまえの気持ちは嬉しいが、危険には代えられない」

「そんなの、皆同じよ。近くにいなければ、癒すことすら出来ないもの」

リンティアの思いは強く、なかなか譲らない。さすがのローレンシアもほとほと困りかけたときに助け舟を出したのがヤンだった。

「悪いがお嬢さん、お前さんを無事に守る手がねえんだよ。諦めな」
いつもの、ぶっきらぼうではあっても優しさが含まれた声ではなかった。それはまさしく戦闘員としてのヤンであり、『アンシアン』リーダーとしてのヤンだった。

リンティアはキツとヤンを見つめてはいたが、灰青の瞳に睨み返されて俯き、大きな瞳に涙を溜めたまま弱々しく頷いた。

「すまないな」

そう言ってローレンシアが彼女の肩をぽんと叩くと僅かに金髪が左右に揺れ、ぽつりと涙がリンティアの膝に落ちる。苦笑しつつローレンシアはヤンに目を向けて軽く頷けば、不機嫌そうに眉を寄せ、ヤンが顎で返事を返して部屋を出て行った。

第十話：金色の三日月

雲の多い夜だった。時折思い出したかのように雲の切れ間から金色の三日月が彼らを照らした。すべてが計算し尽くされた夜であり、あとは数分後のスタートを待つだけだった。リンティアは昨夜のうちに数人の非戦闘員とともにオフォスの北東にあるアジトへと向かった。城に最も近いそのアジトに行くことを強く望んだ彼女は、それが最大の妥協だったのだろう。

エストレージャ城のてっぺんが微かに見える場所で、特攻チームの四名が静かにその時を待っていた。テリー率いる予備メンバーは数チームに別れ、城へ向かうルート of のいくつかへと向かっている筈だった。間もなくどこかで騒ぎが起こるだろう。

ローレンシアは落ち着いているように見えた。細い黒の瞳はまっすぐに城を見つめている。その横顔を見たヤンは、彼女が何を考えているかわかったような気がした。

この革命が成功しても失敗しても、彼女には思いが晴れない理由がある。恐らくそれは父の存在だろう。――成功したとしても、父の存在は彼女の人生について離れない。一身に受けた愛をすべて裏切りで上塗りするような――その行為を彼女は自分に許さず生きていくつもりなのはわかっていた。

だからそんな彼女の傍にしようとヤンは考えていた。彼女を愛しているとかそんな次元の話ではない。ウォーディート卿を裏切ったという事実においてローレンシアと自分は共犯なのだ、と。

「――西から、か」

ぽつりとローレンシアが呟いた言葉で、三人の瞳が西へと向く。闇の色にとろどろ白や赤が輝くところを見れば――始まった。

「ンじゃそろそろ、行くか」

まるでどこかへ出かけるかのように軽くヤンが言う。返る眼差しはみな、緊張に包まれていた。各々が武器を確認すると、ローレンシアの軽やかな走りとともに城へ向かって駆け始める。

すべてはそこから始まったのだ。これから起こる偶然も、必然も、すべてがここから。

第十一話…決起

テリーはエストレージャ城正門の近くにいた。西と東、騒ぎを起すチームがそれぞれ動き始めたのをやはり闇夜に浮かぶ色で知った。恐らく特攻チームはそれを合図に駆け始めたことだろう。その動きが城に伝われば、真っ先に正門から彼らを討つための小隊が飛び出していく——その相手をするためのチームにテリーはいた。逸る気持ちを最大限に抑える。

近衛兵を実際首になったとはいえ、彼にも親しくしていた兵が数人はおり、その相手をする事にならなければ良いと心の奥底で祈っていた。ローレンシアやヤンには言えなかったが、きっと彼らも同じだろう。自分に彼らと同じだけの覚悟があるかどうか——迷わないわけにはいかなかった。

それでもテリーの気持ちを後押しするのはリンティアの存在だった。彼女を守るためには自分がここでその重圧に耐えなければならぬ。その事実はその気持ちを奮い立たせる。

革命が成功したら、とテリーは未来を思う。どこか落ち着いた街でリンティアと暮らそう。彼女はパンやケーキを焼くのがとても上手かったから、僕はその手伝いをして、穏やかに、幸せに——

「……来ました」

チームメイトの抑えられた声音にテリーは現実に戻される。緑の瞳が緊張の色に支配され、彼は腰に帯びた剣を抜く。

「行こう」

短い言葉と同時に彼らは行動を開始した。城の正門から飛び出してきた小隊が彼らを認め、同じように銀の刃を抜く。もう、後戻りは出来ない。

始まった革命の時を、リンティアはオフォスのアジトで感じていた。街はどこかざわざわと落ち着かない。エストレージャ城に最も近いアジトには彼女の他に二人の仲間が来ていた。どちらも予備メンバーから外れたものの戦闘可能な男で、彼女は自分への配慮を感じていた。

祈るように城の方角を見つめる。テリーはにっこりと笑って「大丈夫だよ」と彼女に囁いたけれど、不安が払拭されることはなかった。彼の思想を止めたくはなかったが、テリーの命の危険はリンティアの気持ちまでも毛羽立たせる。

自分の治癒魔法をテリーのために使いたかった、と再度リンティアは唇を噛む。我侘な思いなのは充分承知していたが、リンティアにとって彼は救世主だった。彼がいなければ自分は今頃こんな風に生きていなかったかもしれない。そう思えば、彼のために力を、命を使うことは何の厭いも感じなかった。

しかし彼らが自分の身を案じてくれていることは良くわかった。冷ややかな物言いをしたヤンでさえも、あれは彼の立场上仕方のないことであるということも理解出来ていたし、ローレンシアがこうして気遣ってくれることもわかっていたからこそ、酷く後ろめたくもあった。

「どうか……彼らにご加護を」

祈るしか出来ない自分が酷くもどかしく、握り締める手がみるみるうちに白くなった。

エストレージャ城までの道のりは短いようで長い。東西で起きた騒ぎに駆けつけているはずの国王軍がばらばらと正門前のルートにも現れる。それが偶然なのか計算なのか、ローレンシアたちに考える余裕はなかった。あちこちで賭けられている命を思えば、ぐずぐ

ずしている暇はない。自分たちの攻撃が遅れば遅れるほど、仲間たちが危険に晒される。そんなプレッシャーの中で四人は城を目指して駆けて行った。

正門が見えてくる。その近くで戦闘を繰り広げている数人が見える。その中にはもちろんテリーの金色の髪が見え、僅かな刹那にローレンシアは青い瞳としっかりと思いを伝え合ったような気がしていた。

「急げ！」

僅かにスピードが緩んだのだろう、ヤンの焦った声が飛んでくる。キイン、と剣戟の音を背中に流してローレンシアは駆けた。

特攻チームの一人がそこで迎撃に遭い、足を止めざるを得なくなる。一瞬で判断を下したヤンが「進め！」とローレンシアともうひとりの男に向かって叫んだ。

城の中は王座の間に続く階段が三つあるはずだ。その中でも、狭くて警備の薄い北階段を突破口に選んで迷いなく走る。ヤンが最初にあがり、そのあとにローレンシアが続く。最後にもうひとりの男が駆け上がる。

「――来やがった、ぞ！」

ヤンの緊張した声が響き、それと同時に階段上から複数の足音が続く、ガキン、と剣のぶつかり合う音。ヤンの大きな身体が一瞬縮こまって見え、それから大きく階段を駆け上がる。その後ろを進むローレンシアにもひゅんと剣が振り下ろされた。

第十二話：民のため、国のため

ヤンの大きな身体の向こうに、マントが翻るのが見えた。暗赤色に映える金色の紋章。それをバックに刃の銀色がちらちらと煌めく。

近衛精鋭——予測していたとはいえ、その登場は特攻チームの三人に大きな精神的打撃を与えた。たった二人の男のために、王座の間までがひどく遠く感じられる。視線を動かせば、重厚な扉が視界に入る。あの扉の向こう、倒すべく相手はあそこに——視線を逸らした分、ローレンシアに隙が出来る。それを近衛精鋭が逃す筈がない。キン、と鳴った剣が風を切ってその首筋へと向かう。

「ロージー！」

ヤンがその名を呼ぶのよりも早く、彼の重い剣が目の中の敵からローレンシアへと動く。思いの他早いその軌道は見事に近衛精鋭の剣を弾き返し、ローレンシアはその身を一步、王座の間へと近づけた。

「行け！」

その距離がもっとも短かったことでヤンが瞬時に判断して叫ぶ。二人の近衛兵相手にヤンともうひとりの特攻チームの男が剣を交えその足を留めていた。長い目で見ればやはり精鋭の方が腕は上に見えたが、目標を視界に捉えた人間は強い。

弾かれるようにローレンシアは王座の間へと駆けた。赤いびろろろの貼られた重々しい扉を蹴破るように開けると、最奥の大きな机に座っていた青年の緑の瞳がまっすぐ彼女を射抜く。

「反乱軍……というものか」

王城敷地内の喧騒が届かないわけではない。そしてローレンシアの手にある剣が見えないわけでもないのにロサード王は頬杖をついたまま彼女を眺め、唇を歪めてそう呟いた。

ローレンシアはそれには答えず、目の前、自分とほとんど年の変わらない王を眺めやり、唇を引き結ぶ。

「ロサードⅡエストレージャ王とお見受けする」

「いかにも」

「貴殿の、民を人とも思わぬ私欲に走った政、赦し難し^{ゆる}」
「知ったような口を利くのだな」

ゆらり、とロサードが立ち上がる。ローレンシアは剣をまっすぐに向ける。確か彼はそれなりに出来たはずだ――腰に帯びている長剣に触れる気配はないものの。

「反乱軍よ、では貴様に聞こう。我がエストレージャがこの大陸で生き延びるために必要なものは何だ」

ローレンシアは剣を握りなおして構え、注意深くロサード王を観察した。緑の瞳は禍々《まがまが》しい輝きではあるがある意味人を惹きつける。抑揚を抑えた声はまだ若い少年王の面影をまったく残してはおらず、伸びやかな明るさは失われていた。それを成長と呼ぶのか馴れと呼ぶのかはわからない。

そして王の問いに彼女が答えなかったのは――その訊ね方が決して自分の答えを望んでいるものではないとわかったからだだった。しばしの沈黙のあと、王は返事がなくとも気に止めず語りだす。

「民が生きる前に国が生きねばならぬのだ。わかるか、愚鈍な反乱軍よ。民のためにどんな政を立てようにも、国がなければ何にもならぬのだ。貴様たちは目先のことしか考えぬ。今日のパンのことしか頭にない馬鹿な民たちを守れと？　そのためにこの国を犠牲にしろと？」

ギロリ、とローレンシアを睨む瞳は明らかに怒りが刻まれていた。僅かに怯んだのを彼女自身自覚があった。しかし背面から聞こえる剣戟や抜けてきたここまでの道程を思うと、ここで後ずさるわけにいなかった。ゆっくりと机を回り込んできたロサードは彼女の正面に立つとゆっくり腰の剣を抜ききる。

「それでも気に入らぬというのであれば――あとは剣で聞こう」

構えの体制を取るまで、ローレンシアには攻め入ることが出来なかった。ロサード王の言葉にすべて頷くことは出来ぬとも、理解が出来たからである。しかしその理解はこの場にあってはならないものだった。事実、その理解は彼女の剣を鈍らせる。

第十三話…ルート八

ロサードの動きは緩やかだった。距離を詰め、剣を振り上げ、そして斬り下ろす——ローレンシアはその行為に見入るようにぼんやりとしていた。その身に刃が降りかかろうとしたその瞬間、彼女を現実に戻す声が響く。

「何してる、ロージー！」

はっと我に返ったローレンシアが出来たのは、ぎりぎりその銀色から致命傷を避けることだけで、さすがにその軌跡から逃れきることとは出来なかった。左の脇腹から正面の腹にかけて彼女の衣服は切り裂かれ、じゅわりと赤い液体が一気に滲み出る。痛みは、その鮮やかな色を視認したあとだった。後方からヤンの足音が近づいてくる。

ローレンシアの耳がそれを捉えた瞬間、僅かに逸らした視線の隅でロサードがざっと床を蹴るのがわかった。慌てて振り向けば、まとめて結んだ髪が視界に広がり、薄い金色の向こうに緑の瞳が大きく見えて——

「ロージー！」

ヤンの声が、一瞬、遠く聞こえた。

咄嗟に倒れるのを堪えるようにローレンシアの身体が不自然に揺れ、その拍子に大きく後ろに一步、引く格好になる。それは反射とはいえ幸いだった。ついさっきまでローレンシアの首があった場所に、赤く染まったロサードの手になる剣がその空を切り裂いたからである。

「ロージー！」

もう一度、ヤンの声。今度はやけに近い。やっと自分の足に力が入ったと感じられたローレンシアは、目の前の青年から目を離さずに、叫んだ。

「……ルート八を指令しろ！」

叫ぶとともに、腹の右側に強い痛みが襲う。歯を食いしばっていないければ意識を手放してしまいそうな激痛に堪えながら、ローレンシアはその傷をつけた主——ロサードを睨んだまま、もう一度叫んだ。

「即刻だ！ 全員ルート八を取れ！」

まるで傷口からゴプリと音がするかのようになり、血が溢れていくのがわかった。もう、叫べない。背中から聞こえていた足音は止まっているようだ。——ルート八。

万が一を考えた脱出ルートを考えてのはテリーだった。彼は心配性なのか、逃走ルートを幾つか考え、自分でラインを引いた国内地図を広げてメンバーに見せていた。そして幾つかのレベルを伝達する合図を決めたのだ——ルート八。最も最悪のパターンだったときに発する、合図。

決起失敗、生命維持を最優先に速やかに撤退せよ。

その指令は本来、反乱軍リーダーであるところのヤンが発声するものであるはずだった。しかしローレンシアは自分が負った傷の深さとヤンの性格を考えて——恐らく彼は王を倒すよりも自分を助ける方に意識が向くだろう。そして戦いに集中できなければこの若き青年王は倒せない。

僅か数回剣を合わせただけで、ロサードの腕が相当なものであることを彼女は感じていた。いつものヤンならば勝てるかもしれないが、

この状況では守らなければならないものが多過ぎる。

第十四話…王城脱出

バタバタバタ、と聞こえた足音はヤンのものでないことはわかった。恐らくは特攻チームの男だろう。命があつて逃げおおせるのならばそれでいい――ローレンシアは飛びそうになる意識を必死で捕まえてロサードを睨み続けた。緑の瞳がニヤリと彼女を捉える。

「随分とやんちゃんお嬢さんだ」

完全に馬鹿にした口調のそれも、今のローレンシアにとってはただの音にしか過ぎなかった。とにかくヤンがここを離れてくれなければ――それだけを思い、耐えていた。

しかしローレンシアの期待通りには当然いかず、ヤンは彼女を残してルート八を取るつもりなどひとかけらも無くそこに立っていた。彼女の身体から夥しい量の血液が零れているのは見えていたし、彼女の声も身体も尋常ではなかった。その意識がピリピリと自分の気配を窺っていることもわかっていたが、その期待に沿うことは出来そうにない。

前方にライオン、後方には狼が構えているこの状況は絶望的だ。どんなに可能性を探してもちっぽけな欠片以外道筋が見えてこない。ローレンシアだけでも、と考えなくもないが彼女の傷を考えると難しそうだった。

「走れるか」

ローレンシアに届くか届かないかの音量でヤンがそう訊ね、それと同時にロサードへ斬りかかる。身軽な動きでロサードがその刃を避けると、ヤンに向かって剣を振り下ろす。身体の大きさからは予想できないほどヤンの動きは俊敏で、振り下ろされた剣は空しく空を切って床に突き刺さる。その隙にヤンがマントを投げ、後ろに控えていた近衛精鋭二人の視界を完全に遮った。

何かを叫ぶ間もなく、ローレンシアはヤンに半ば抱きかかえられるようにして階段へ向かう。上がってきた北階段の下から多くの気配を感じたヤンは迷うことなく正面階段へ足を向けた。

その判断の早さが幸いだった。ローレンシアが手負いとはいえ、剣を交えず逃げることを優先すれば近衛精鋭の追従に捕まらずに城外へ出ることに成功した。

城の敷地内は混沌としていた。近衛兵と国王軍兵士とそれから『アンシアン』の人間、そしてこの決起に便乗した国民たちがわらわらと剣を交え、逃げ惑い、混乱の極みだった。一瞬、ルート八の発令が届いていないのかと思ったヤンがもう一度叫ぼうとしたが、門の近くの『アンシアン』メンバーが撤退を始めているのを認めてそっと正門から離れて東門へ向かい、敷地から脱した。

腕の中のローレンシアはぐったりとしていた。まだ意識はあるようだったが、歩くのが精一杯、ヤンが引きずるように抱きかかえて走るのでさえ彼女の身体には負担が大きいことはその出血の多さが物語っている。チツ、と舌打ちをしてヤンは仕方なく、ローレンシアを抱き上げようとする――が。

「……先に、行け」

「何馬鹿言ってやがんだ、阿呆」

血の気のないローレンシアの唇がそう動き、こいつはマズイかもしれない、とヤンは背中が寒くなる。一方ローレンシアは自覚がなかったが、予想外にヤンが狼狽していたのを感じて自分の傷の深さを感じていた。それならば余計に、ヤンに負担をかけるわけにいかない。

第十五話…客観的最善策

半ば無理矢理、ヤンがローレンシアを抱き上げた。兵がいはいはいといつの付近に戻ってくるかわからない。もしかしたら追っ手が向かってくるかもしれない——もしそんなことになったら、確実に自分がヤンの足を引っ張ることがローレンシアには見えていた。

大通りを過ぎて小道に入ると、ヤンの足も少し緩んだ。まだ闇は続いているが城の喧騒を感じているこの辺りの家々はどこかそわそわと忙しない。腕の中のローレンシアが窮屈そうに身体を捻ろうとするのを感じて、ヤンは慌てて小公園へと入り、あまり手入れの行き届いていない木々の間、下草がしっかりとクッションになってくれそうな場所を選んでその身体を横たえた。

くう、と悲鳴か溜息かわからない声を呼気と一緒に吐き出したローレンシアは二三度、大きく呼吸をするとその青白い頬に幾分かの赤みを取り戻し、瞳を開いた。

「ヤン、頼みがある」

その先のローレンシアの科白を、ヤンは予想できるような気がしていた。

「この先、エンテのアジトまではおまえひとりで行ってくれないか」
ローレンシアの瞳はまっすぐにヤンを見つめていた。怒りも、諦めも、悲しみも、なにもなかった。ただそれは指示であるというだけ——

その言葉を予想はしていたが、ヤンは聞きたくはなかった。言葉にされてしまうと自分が抗えないのがわかっていた。もしもローレンシアがここで取り乱して怒りや悲しみをその言葉に込めてくれたなら——無理矢理にでも引きずっていくのに、彼女の声にはその片鱗もない。ただ淡々と、いつもどおりの声音で告げたただけだ。

——出血のせいで少し、呼吸が荒れていた。

「無駄にはしない」

ヤンが黙ったまま見返していると、ローレンシアはふっと口元を緩めてそう呟いた。

無駄にしない、だと？——ヤンは内心、泣き出してしまいそうな衝動に駆られる。何をだ？ 何を無駄にしないと言ってやがる？

お前がここでもし死んだりすれば、何もかもが無駄になっちまうってこと——

僅かに、ローレンシアが笑んだままうつすらと頷く。その目許は柔らかい。ヤンはますます悲しげに眉を顰^{ひそ}めた。

その様子に、ローレンシアは申し訳ない思いでいっぱいだった。この誠実な男はこの土壇場でも自分を捨てきれないかもしれない。苦汁の決断を迫っている自分が一番、この友に残酷な仕打ちをしているのだということもわかっていた。しかし、情けでは生きていけない。彼女自身もう自分で動けないこともわかっていたし、だんだんと身体が重くなるのも感じていた。このままヤンを巻き込むわけにいかないのだ。彼にはリーダーとしての仕事が残っている。

「……了解」

長い沈黙の後、ヤンがぽつりと呟くとすっと立ち上がる。その姿を見上げる格好さえもローレンシアには厳しかったが、表情には出さずにもう少し、口角を上げた。

見つめ合ったのは何秒だっただろう。ヤンはきゅっと唇を引き結び、どこか怒っているような表情のままでくると背中を見せると一気に駆け去った。後ろは振り返らなかった。

その後姿が小さく消えていくのと同時に、ローレンシアは自分の身体がまるで泥のように重く、ずるずると力が抜けていくのを感じていた。瞼さえも開けられずに目を閉じて、そしてそのまま——闇の中に自分が溶けていくように、感じた。

第十六話…後ろ髪引かれる思いで

ヤンは一切振り返らず、休みなくエンテまで駆け通した。途中で身体の方が悲鳴を上げて何度か足取りは緩くなつたが立ち止まりはしなかった。止まってしまふと身体中の震えががくがくと音を立てそうだった。実際、彼の歯の根はいつまでもガチガチと音を立て、思い切り力をこめておかないと駆けながら舌を噛み切りそうだった。強く食いしばりすぎて口の中の感覚は麻痺していた。そして少しでも足を緩めれば、きっと自分は今来た道に戻ってしまうだろうことも、ヤンはわかっていた。

ローレンシアを置き去りにしていくことは――確かに、もしかしたら最善の選択かもしれない。けれど感情は別物だ。最善にして最悪の選択を今自分がしてきてしまったことを、ヤンは一生忘れぬために心に刻みつけながら走り続けた。

エンテのアジトに着いたのは翌日の夜中だった。木の扉を四つ叩くと、出てきた不安顔の仲間たちがヤンを見て驚きの声を上げる。

「どうしたんだ、君ひとりか？」

「顔色が悪いな。足が震えているぞ」

「傷の手当てもしないと――湯を沸かそう」

「まさかずっと駆けてきたのか？」

「疲れているだろう、座った方がいい」

「ローレンシアは一緒じゃないのか？」

何気ない言葉は確実にヤンの心臓を抉った。まるで心臓を潰されたかのような圧迫感がヤンを襲い、その大きな身体がよろりと揺れる。

「――ヤン！」

「大丈夫だ。――悪イが先に休ませてくれ」

ヤンの、ここまで真面目な声音を聞いたことのなかった仲間たちは一瞬詰まり、ヤンが奥の部屋の扉へ向かうのをただ黙って見送っていた。彼の真摯な横顔や、青白い顔色や、低く抑えられた声音が――事実の重さを示していた。

第十七話：見知らぬ男

まるで自分の身体が鉛になったような重さだった。意識が浮上したのはわかったが、全身が固まったように指一本動かせない。瞼ひとつも、だ。自分が生きているのか死んでいるのかもわからない。

しばらく閉じた瞼の裏の世界でゆっくりと考える。呼吸は浅いが落ち着いている。身体を動かせないのはもしかしたら、麻痺でもしてしまったか？ そう考えて力をこめた右腕が唐突に宙に浮き、ぱたりと上掛けの上に落ちた。

そう、そこでやっと右のてのひらが上掛けに触れたことを感じる。骨を通して冷たい痛みがツキンと身体を貫き、「う……」と微かな呻き声が口をついた。

傍で誰かが身を起こす音が聞こえる。衣擦れの音。ああ、生きているんだ——と、ローレンシアがやっと感じたとき、まるで魔法が解けたかのようにゆっくりと瞼が上がった。

「——やあ、おはよう」

視界がそのピントを合わせた先には黒髪があった。声は男。その黒髪がゆるく波打っていることが見えてそして、明るい茶色の瞳がにっこりと笑っていた。

知らない男だった。記憶を手繰るが、『アンシアン』のメンバーでないことは確かだった。ローレンシアは用心してただ瞳を男に移すだけに留めた。

「気分はどうか」

穏やかに続ける声に悪意はなく、男は急かす風でもなく微笑んで上掛けの上に置かれたローレンシアの右手をそっと取り、ゆっくりとした動作で脈を測る。その仕草から傷が痛まぬように、と気遣っ

てくれているのがわかってローレンシアは僅かに安堵した。

どうやら敵ではないらしい、というのがその理由だった。しかしすぐにふと思う。もしも自分がここにすることがわかれば、匿ったとしてこの男も一緒に処刑されるだろう。『アンシアン』メンバーだと知らなかった、などとそんな訴えが通るわけがない。――あの男、ロサードⅡエストレージャにおいて。

あたしのことを知らずに助けた、と言えばきつと、ロサード王は逆にそれを利用するだろう。なんと言ってくるか目に浮かぶようだ。『愚かな反逆軍よ、貴様たちのために善良な国民が犠牲になることをどう考えるのだ？』――と。

「何か食べられるといいのだけど――ああ、スープなら飲めるか」

ローレンシアが声を発するよりも早く、男がそつと彼女の右手を上掛けの中へ仕舞い、そしてにこやかに言いながら立ち上がる。咄嗟に体を起こそうとしたローレンシアを見咎めて、男は笑みを浮かべたまま彼女の頬に右手を触れた。

「起き上がらないで待っていて？」

何も聞かず、ただ自分のことを思いやってくれる見知らぬ男にローレンシアは安堵を覚えた。オフォス内にあの騒ぎの噂が駆け巡るのにそんなに時間は必要ないはずだし、その騒ぎのあとに刀傷を負った死にかけの人間がいれば想像は容易だろう。

深く肺に呼吸を吸い込み、目を閉じる。鈍い痛みが右腹に響き、ローレンシアは自分が生きていることを再認識する。

ヤンは――酷く気落ちしていることだろう。最善の策とはいえ仲間を見捨てる選択をさせたのは彼にとって酷だったかもしれない、とローレンシアは目を閉じて信頼する友を思う。いや、ヤンだって怪我をしていた、無事にアジトに着いただろうか。

一度仲間のことを思うとローレンシアの思考は止まるところを知らなかった。リンティアは大人しく逃げただろうか。まさか城へ向かうなんて馬鹿なことをしていなければいい。テリーは無事に逃げ

ただろうか。あの男の性格上、チーム全員が引き上げたのを確認しないうちは自分が退路を取るなど考えもしないだろう。

「大丈夫だよ」

唐突に男の声がすぐ間近で聞こえ、ローレンシアは自分が涙を流していることにも気付く。拭おうにも腕はなかなか思うとおりに動かない。彼女自身の手がその雫を拭うより早く、温かな掌がそっとローレンシアの頬を滑る。

「まずは貴方が自分自身の身体を治すことを考えるのが先だ。――さあ、ゆっくり」

男の腕がローレンシアの首の下に差し込まれ、ぐっと力が込められる。まるで抱き寄せられるかのようにローレンシアの身体は男に寄り添うように起き上がった。その背にクッションを幾つか差し込まれ、半身起こした身体を支えてくれる。

第十八話…スープの温かさ

ゆっくりと目を開けたローレンシアは真っ直ぐに男を見た。緩いウェーブの黒髪、明るい茶色の瞳。穏やかな顔つきで恐らく自分より幾つか年上だろう、と彼女は感じた。背は高いようだがほっそりとしており、長めの手足が妙に目立つ。

男がスープ皿を手渡してくれるのを、不器用に受け取ってローレンシアはスプーンを握った。

「食べさせてあげてもいいけれど」

男は笑うと幼く見える。ローレンシアは初めてその瞳に不愉快そうな光を宿す。

「お構いなく」

それが彼女が初めて男に向かって発した言葉だった。それを聞いて、男は軽く肩を竦める。やっと生きているような感じがする、と考えながらローレンシアがスプーンを扱う様子を見守っていた。

随分と時間をかけて一皿のスープを飲み干すと、ローレンシアは改めて礼をいい、名だけを告げた。『アンシアン』のことは口にはしなかったが、おおよそ男は予想しているように彼女が言いよどむのをさりと遮った。

「私はヒューイ、だ。よろしく、ローレンシア」

言ってヒューイはそつとローレンシアの手に自分の掌を重ねた。握手代わりのつもりらしい。そしてちよつと眉を寄せる。

「とりあえずはここにいたほうがいい」

「そういうわけには」

「私は構わない」

「……あたしが構うんだ」

ヒューイは思わぬ頑固な抵抗にどうしたものかと考える。ローレンシアの負っている傷は決して軽くはなく、命の危機は脱したとは

いうものの問題ないとは言えなかった。

それに、とこれは彼女に言うつもりはなかったが、このオフオスの外れにさえも国王軍がちらほらと見受けられる。早朝、彼女を拾ったときはまったくだったのが、その日の夕方頃からわらわらと警備兵がうろつき始めていた。その目的が何なのか、ヒューイにはわかっていないような気がした。恐らくは彼女――国王軍より早く街を飛び交った噂話によれば、あの日の深夜城は反乱軍に攻められたとのことだった。致命傷になりうる刀傷を負って倒れていた彼女がそれにまったく関わっていないわけではない。ヒューイはそれを感じてはいたが問い質すつもりはなかった。

「何故？」

ローレンシアに問うと、彼女は意外な質問に一瞬怯み、そして目を伏せる。しばらく黙っていたのでヒューイはそれ以上質問を重ねるつもりはなく、ただ傍にいた。長い沈黙のあとに出てきたのは

「迷惑がかかる」

という一言だった。何故迷惑がかかるのか、についてそれ以上ローレンシアは説明するつもりもなかったし、ヒューイはかなり正確に彼女の意図を理解していた。

「私は、構わない」

「あたしが構う」

同じ押し問答に戻ったのをヒューイがくすりと笑った。そして彼女の髪にキスをしながらその身体をまた横たえる。

「貴方が立ち歩きが出来るようになったら今の話の続きをしよう。いいね？」

ローレンシアにしてみればそれは苦渋のイエスだったが、それ以外にどうしようもなかった。まさかこのまま戸口の外に放り出してくれ、と言うわけにいかない。善良な一国民であるヒューイがそれを許すような男には見えなかったせいもあった。

ベッドでほうっと息をつき、彼女は『アンシアン』の仲間のことを考えていた。

第十九話…愛おしき再会

同じ頃、テリーはやつとの思いでリンティアと合流していた。ルート八の発令には驚いたが彼らのことを信じていたのでその発声は酷く厳しい状況下ぎりぎりで出されたものだろうとわかっていた。城の前庭で戦鬨を繰り広げる予備チームのメンバーが全員撤退を始めたのを見届けてから、彼はチームメイトが向かうのとはまったく逆の東へ向かって駆け始めていた。

リンティアがいるアジトはもつともエストレージャ城に近い。まさか国王軍の手がすぐに伸びるとは思わないが彼女がもしも頑として逃げなかったり、もしかすると逆に城へと向かっていたりしたら、と思うと自然と足は速くなった。定められたアジトが見えるのと同じ時に、その前で祈るような手のかたちをしているリンティアが同時に見えた。

彼女が何か叫んでいる、とテリーは感じた。実際、リンティアはテリーの名を叫んで駆け寄ってきたのだが、その声さえも届かないくらい、テリーの頭の中はリンティアでいっぱいだった。この瞬間、テリーは『アンシアン』のこともヤンのこともローレンシアのこと、も、忘れた。腕の中に彼女がいる。ただそれだけで、テリーの幸福は戻ってきたのだ。

「テリー、テリー！」

「リンティア……無事でよかった……！」

言葉は要らなかった。ただ名前を呼ぶだけで、あとは腕や胸が相手の体温を伝えてくれる。抱きしめあえる相手の存在に、二人はこれ以上ない幸福を噛み締めていた。

エストレージャ城に最も近かったそのアジトにはリンティアのほかに二人の男がいて、彼らも無事だった。正確に言うとな片方は頬にかすかな傷痕があったが、テリーがその原因を問い詰めると苦笑し

ながらリンティアを指した。どうやら、危険だからアジトの中で待てと何度言っても聞かず、最後には止める腕を振り払って引っかい
たらしかった。

翌日、発令されたルート八に基づいて逃げてきた『アンシアン』
メンバー二人が合流し、それと入れ違うようにエンテのアジトへ報
告に二人の男たちがアジトを発った。四日後、戻ってきた彼らから
ヤンの現状と、それからローレンシアが消息不明だということが伝
わってきた。城の敷地から脱出する二人の姿をちらりと視認してい
ただけに、テリーにとってその事実は衝撃的だった。

つまり――ヤンは、ローレンシアを置き去りにしたのだ、という
こと。そしてそれを今ひどく悔やみ、どれだけ苦しんでいるか……
さすがにリンティアもそれに気付き、いつもの晴れやかな笑顔は見
られなかった。

第二十話…彼に言伝を

ローレンシアは幾度となく外出を望んだが、ヒューイがそれを許さなかった。彼女の傷は予想以上に深く、歩き回れるようなものではない。重ねて問われるその問いに、最後には答える言葉もなく彼は悲しげに眉を寄せた。

「すまない……無理を言っているのもわかってはいる、が、なんとか連絡が取りたいのだ」

「だから言っている。私が代わりに伝えよう、とね。貴方が何故それを拒むのかわからないけれど」

予想しているだろう、と思っではいたが、ローレンシアは『アンシアン』のことをヒューイに告げなかった。ヒューイもまた、彼女が自発的に口にすること以外に言及することはなかった。代理を申し出たのは半分がその真偽を確かめたいという思いであり、もう半分が、きっとローレンシアは自分にそれを望まないだろうという推測の上でだった。

ローレンシアは一日のすべてをベッドの上で過ごすこの数日、仲間たち――特にヤンに、自分の無事を伝えることすら出来ない現状が歯痒かった。ヒューイに伝言を頼むことも何度も考えたが、決めていたアジトにまだ誰かがいるかどうかはわからないし、命の恩人であるヒューイを危険に巻き込みたくなかった。そんな揺らぐ思いに挟まれた自分に深くを問わず、ただ傍にいてくれるヒューイに好意を感じていた。

しかし、それも目を覚ましてから五日が限度だった。これ以上何も連絡をしないわけにいかない、とローレンシアは考える。ヤンのことだ、自分を探しに無茶をすることも考えられる。それにテリーとリンティア、あの二人が無事なのかどうかも気にかかる。テリーは妙に責任感が強かったから……自チームのメンバーを最優先にする

だろう。その結果逃げるのが遅ければ、リンティアが無茶をしないともしない。あの若い娘はいつもの素直さとは裏腹に、テリーが絡むとひどく強情だ、と二人に共通した金色の髪を思い出しながらローレンシアは深く溜息をついた。その僅かな動作でまだ脇腹に痛みが走る。そう、ヒューイの指示は正しい。思いのほか深い傷だ、無理をすればまた命の危険に晒されるだろう。

自分が身動きできないのなら、あとはヒューイに頼むしか術はなかった。彼を危険の道に引きずり込みたくない、というのは最後の最後まで彼女にブレーキをかけたが、それでも最後にはその選択をすることになった。危険なことは、紙などに記さずに彼に口頭で伝える。

「わかった。そこへ行つて、ヤン||メイフィールドにと伝えればいいんだね」

ローレンシアの頼みを聞き終えると、ヒューイはいかにもお安い御用というように立ち上がり、隣の部屋からマントを持ってくるとばさりと身にまとう。

ローレンシアが簡単に説明したオフオスの『アンシアン』のアジトの場所は、ここに住んでいるヒューイにとっては知った場所のようで、細かな地図は要らなかった。

「夕方には戻れると思う。——そんな顔、しなくていい。私は問題ない」

心配そうな色がローレンシアの細い瞳に浮かんで、ヒューイは少し笑ってそう答える。ローレンシアはあまり表情を動かさないが、その瞳だけは随分と雄弁だった。まるで小さな幼子のような不安をたたえた瞳に、ヒューイはくすりと笑みを零してそっと頬に触れる。

「大丈夫」

頬のぬくもりはローレンシアを安堵させるのに充分だった。胸のどこかにつかえていた塊が溶けたような気がして、ローレンシアもつられて微笑む。

そのままヒューイは、じゃ、ときびすを返すだろう、と考えると、それはこの場合妥当で、それ以外はありえないはずなのに、急にローレンシアの胸には安堵とは別の感情が沸き起こった。彼を危険に向かわせるからか、とその感情に不安という名前をつけようと思ったのと同時に、ローレンシアは無意識にヒューイのマントの裾を掴んでいた。そしてその小さな手の動き――ローレンシアにとっては感情の揺らぎ――は正確にヒューイに伝わり、彼はローレンシアの頬に添えた手をそのままに、自分の身体を二つに折った。

斜めに傾けられたヒューイの顔がすぐ傍にある、とローレンシアが思ったのとほぼ同時に唇が重ねられ、驚きに一瞬彼女は身を固くする。しかしその柔らかい口付けに、ローレンシアはそっと瞳を閉じた。驚きと一緒に彼女に唐突に訪れたのは、温かな恋、だった。

二人にとって長い長い時間がそこに横たわり、ヒューイが身体を起ここしてゆっくりと離れるのをローレンシアは視線だけで追った。その、無意識に切なげな瞳の色に、ヒューイは身体を興すのを途中で不自然に止めると、ローレンシアの傷に障らないようにそっと両手で彼女を抱きしめ、そしてもう一度、唇を重ねた。

二人にはそれ以上言葉は必要なく、ヒューイは笑顔とローレンシアを残してオフォスの街へと出て行く。その姿をローレンシアは不安ではなく信頼で見送った。ベッドで横たわっているしか出来ないわけじゃない、と、彼女は天井を見つめたまま胸の上で両の手を組み、ヒューイの無事を祈りつつづけていた。

第二十一話：朗報の訪れ

ローレンシアの告げた道順はとても正確だった。そんなところでも彼女の能力の高さに気づかされる。

ヒューイはもちろん、あの夜に傷ついた彼女が噂の主であることは予想していたが、今回伝言を頼まれて初めて告げられた彼女のフアミリーネームに聞き覚えがあった。ローレンシアⅡウォーデイト。父がかつての近衛副隊長、女性で初の騎士であり、そしてたしか去年、不慮の事故で亡くなったはず。そこまで記憶を掘り返してもうひとつ思い当たる。彼女が伝言を頼んだ相手――ヤンⅡメイフイールド。ローレンシアと一緒に死んだ男の名前だ、と気づいてヒューイは二人の意図を知った。

指示どおりの道順の先には、彼女の言ったとおりの扉があり、ヒューイは告げられたとおりの数だけそれをノックする。留守でないとすれば随分と長く待たされて細く扉が開く。相手の姿は見えない。

「誰だ」

「『特攻チーム』の女から伝言を預かってきた」

それもローレンシアに指示された言葉だ。名前を出さない方がいいのはヒューイにもわかっていて。聞いて、扉の向こうの人間がはつと息を呑むのがわかる。

「……ローレンシアの？」

「中で話したい」

予想外にはっきりと彼女の名前が告げられて、ヒューイは慌てて低い声で告げる。相手は警戒したようにしばし沈黙し、それからやつと「わかった」と言うとゆっくりと扉を引いた。

簡素な室内が見て取れ、男が用心深くヒューイを警戒しながら扉を閉める。何も持っていない、の意味を含めてヒューイが両手を軽く上げると、男は僅かにその警戒を解いた。

「伝言を聞こう」

それでも完全にフレンドリーとはいくまい。剣の届かぬ距離を保って、男が無駄のない質問を放つ。ヒューイは彼女の言葉を頭の中で反芻しながら注意深くその名前を口にした。

「ヤン・メイフィールドは無事でいるか？」

「……それが伝令か？」

「いや、彼女が知りたがっていた情報だ」

男は胡散臭げな眼つきでヒューイをじろじろと無遠慮に眺めている。その視線が気にならないとは言わないが、ヒューイは完全に開き直って戸口近くの椅子に腰掛けた。

「伝言を聞こう」

男は答えず、同じ質問を重ねる。未だ警戒中という態度がありありと見え、ヒューイは僅かに肩を竦めてみせた。

「命は助かった、だが怪我のために出歩けない。動けるようになったら必ず戻る」

棒読みで一気にそこまで言うのと、最後の一言の前に呼吸を挟んだ。

「すまなかった、ヤン、と」

男がそこで目を見開いてヒューイを見つめる。彼としてはこれ以上言うべき言葉をもたず、相手の出方を待っていた。

部屋の奥にあるもうひとつの扉に気づいたのは、ギイと錆付いた音がしてからだった。男が弾かれたようにその視線を奥の扉へと向けると、金髪の男が現れる。

「……テリー！」

「あとと僕に」

「しかし……」

男は警戒した視線をちらとヒューイへと向けるが、思わぬ強いテリーの視線に諫められてしぶしぶといった風に奥の扉へ消えた。

それを確認するように、緑の瞳がヒューイへと向けられる。当初浮かんでいた厳しい輝きはそこにはなく、力を抜いて微笑むとテリーの印象は柔らかくヒューイに映る。

「失礼したね。まだ皆ピリピリしていて――僕はテリーⅡホワイト」
テリーに右手を差し出され、ヒューイ椅子を立ててじっとその手を見つめていたが、やがてそっと自分の手をそれに重ねた。テリーが嬉しそうに笑みを広げる。

「あなたの名前を聞いても？」

「ああ――ヒューイだ。ヒューイⅡヴェンセル」

よろしく、とばかりにテリーはにっこりと笑って頷く。握手を解くと「どうぞ」と奥のテーブルにヒューイを案内し、客人が腰をおろしてから自分も斜め向かいに腰掛けた。

「ローレンシアを助けてくれたのか？」

「そう……なるかな。彼女が倒れていたから、連れて帰った」

「ありがとう」

テリーは背筋を伸ばすとそう言って頭を下げた。笑みは止まらない。彼女が無事で本当に良かった、とその喜びでいっぱいだった。

あの夜、テリーは城からオフォスのアジトへと逃げてリンティアと合流した。それからヤンたちに連絡を取ろうとするも、ヤンがひどく落ち込んでいるとの情報しか入ってこず、ローレンシアの口の字もなかった。テリー自身も随分とやきもきさせられたものだった。明日にでもリンティアを伴ってエンテのヤンのところへ行こうかと考え始めていた矢先のことだった。

テリーの目の前の男は愛想はないものの、その誠実さだけは伝わってきた。ローレンシアがこの男に助けられたことを幸運に思うと共に、テリーは彼女が伝言を寄越すその理由を考えていた。ローレンシアの性格上、無事を伝えたいと思うだろうが他人を巻き込むことは考えられなかった。ましてやこの男は『アンシアン』のメンバーではない。その危険を顧みないはずがなかった。

「失礼を承知で訊ねるんだけど、彼女はあなたになんと言っている役目を頼んだか、教えてもらえないかな？」

ヒューイはちらとテリーを見た。質問の意図を測りかねてだったのだが、テリーはその視線を不信の意と捉えて慌てて付け足す。

「あなたを信じていないわけじゃないんだ、ただ、ロージの性格からして誰かを巻き込むようなことは考えにくくなって思ってたね」
ロージ、という愛称を耳にしてヒューイはテリーが彼女と親しかったことを察した。それならばさっきの溢れんばかりの笑みも納得できる、と目の前の男に好意を持った。

「元は私が言い出したことだ。怪我を押して出歩こうとするのでね、連絡だけなら代わりに、と」

「でも、なかなか聞かなかっただろう？」

悪戯っぽくテリーが混ぜ返し、ヒューイもつられて笑いながら「ああ」と答える。和やかに場が丸くなったその時、奥の扉が再度ギイと音を立て、瞬時に二人の表情から笑みが消えた。

テリーが腰に帯びていた短刀に手を伸ばそうとしたとき扉の向こうから姿を見せたのは、彼と同じ金色の髪に青い瞳の女、だった。手にしたトレイにはカップが三つ。

「……リンティア」

ほっとしてテリーは浮かせた腰を椅子に落とす。その向かいではヒューイが、まだ警戒を解かずに彼女を見つめていた。

「ごめんなさい、お邪魔して。お客様に紅茶を。——どうぞ」

悪びれない笑顔でリンティアがカップを二つ、テーブルに並べる。そして最後のひとつを抱えてテリーの隣にちょこんと腰を下ろした。
「ロージを助けてくださったんですね？　ありがとうございます！」

「リンティア、きみは……」

「あの、とっても差し出がましいんですけど：お見舞に行ったら駄目かしら？」

唐突な申し出に、ヒューイは瞬きを繰り返しながら即答を避けた。リンティアの様子からして彼女がローレンシアやテリーと親しいことはよくわかったが、ローレンシアが怪我で動けないからといってそれならば仲間の方を彼女のところへ連れていくことは——今まで考えたこともなかった。

ヒューイが想像していた『反乱軍』はもっとゴツイ……そう、最

初に彼を迎え入れた男のような者ばかりと思っていたのもあり、テリーの柔らかな物腰やリンティアのように見るからに戦いに向いていない女性までがいるとは思ってもみなかったのである。

テリーが小声でたしなめ、それにリンティアが抗議の声を上げているやりとりを見ながらヒューイは考えた。確かに、見るからに反乱軍のような男が出入するよりもリンティアのような女性が入るのなら周囲に疑われるようなことも少ないかもしれない。数日なら、誤魔化せる。彼女もきつと安堵するだろう。

「テリー、馬を貸してもらえるか？」

「え……？」

「それとリンティアを数日。――もし貴方が来てくれればきつと彼女も喜ぶだろう」

ヒューイの言葉の後半はリンティア本人に向けられていた。嬉しそうに微笑むリンティアの隣で、テリーがきよとんと二人を見比べていた。

第二十二話：リーダーシップの復活

ヤンⅡメイフィールドはそのリーダーシップと共に、不動なる精神力とそれに見合うだけの剣の腕が与えられた、生まれながらの指導者であるとの評判であり、『アンシアン』のメンバーにはその力に惚れこんだ者も多い。そして特筆すべきことは、力でカリスマ性を示す者にありがちな頭脳戦でのレベルダウンはヤンについては感じられない。なかなかにも頭も冴えるということだ。

『アンシアン』メンバーが今まで見てきたのはそんなリーダーシップに秀でたヤンⅡメイフィールドだった。

ルート八の指令は意外だったが、ヤンが判断したのならそれほどまで厳しい戦局だったのだらうと納得していたメンバーも、その後アジトに辿り付いたあとのヤンの姿は想像外だった。今までになくひどい顔色で、なにかを訊ねても耳に届いていないかそっけなく返される。今後どうするか、の話を振ったあるメンバーは灰青の瞳で射抜き殺されるほどに睨まれ、それきりヤンの傍に近寄らなくなっただけだった。

そんなリーダーの様子と、それから彼にいつもぴたりと行動を共にしていたローレンシアの姿が見えず、ヤンがそれに触れもしないことで――彼らには何が起こったのかうすうすと察することが出来、さすがにヤンにローレンシアの話を切り出す者はいなかった。

ヤンは部屋に籠って誰とも会おうとも話そうとも、物を口にしようとしなかったが、きっかり三日後、ふいに部屋から出てきたかと思うとつかつかと浴室に消え、頭から水を被った状態でメンバーのいる部屋に戻ってきた。相変わらず顔色は良くなかったが、瞳の険しい光は随分と弱まっている。

「その後の状況はどうなっている」

さすがに機嫌良くとは言わないまでも、仕事を思い出したリーダ

ーの指示に皆が一様にほっとして、エストレージャ城の現在の様子を報告する。一通り聞いていたヤンがしばし黙り込んでから短く指示を出した。

「各地でのメンバーの安否を」

「ラジャ」

聞いた男たちの中の数人がその足で踵を返す。ヤンはそのままマントを掴むと出て行こうとするのを――ひとりが止めた。

「ヤン、どこへ行く」

「構うな」

「あんたは俺たちのリーダーだ。あんたに今いなくなれちゃ困る」男の言い分はもっともで、その口調は責めるわけではなくヤンの思いを理解したものだ。それが本人にも痛いほど伝わったので、ヤンは諦めて部屋に戻る扉へと向かった。

「……テリーとリンティアの情報が入ったら起こせ」

「ラジャー、ボス」

その中にローレンシアの名前がないことに男たちは気づいていたが、言及は出来なかった。

第二十三話：彼女を守るため

疲れている、というわけではないはずだったが、身体を横たえて祈りの姿勢をしていると自然に眠りに引き込まれたようだった。昼過ぎまでは起きていたはずだったけれど、と記憶では僅かに西に傾きかけた日が差し込んでいた窓を見やれば、既に夕焼けの終わりに近く、夜が始まりかけていた。ヒューイはまだ戻らない。

彼が出掛けに夕方には戻る、と言っていたのを思い出して、ローレンシアは扉の方へと目を向ける。何かあったのでなければいい、とそれだけを願っていた。

だから彼女の耳に蹄の音が響いた時は全身がすうっと冷たくなった。ヒューイは馬を持っていない。オフォスのアジトにも徒歩で向かったはずだった。それなら、まさか――？ 動かない自分の身体が歯痒く、こんなことなら剣だけでも手元に置いておけばよかったと歯軋りをする。上半身を起こすのだけでも精一杯で、僅かなその動きでも痛みが身体を貫く。ローレンシアが扉を睨みつけたときと同時に、それが勢いよく開かれる。

「――ロージー！」

金色の蝶が迷い込んできたかのようだ、と最初にローレンシアは感じた。青く澄んだ瞳にはみるみる涙が溜まって、そばかすのある頬にぼろぼろと零れていった。

「ロージー……！」

上半身を起こしていたローレンシアにリンティアが抱きつく。それは彼女の怪我を思えば随分と乱暴だったが、ローレンシアにとっては痛みよりも何よりも安堵と嬉しさの方が何十倍も強かった。

抱きしめる腕を緩めると、リンティアは涙も拭かずにローレンシアの至近距離に顔を寄せ、その両頬を手のひらで包む。まるで母親が子にするようだ、とローレンシアは苦笑を禁じえない。

「ああ、本物だわ、本物のロージーね……？」 ああ、無事でよかった

た……！」

リンティアはなかなか泣き止まず、涙に濡れた頬をべたべたとローレンシアに押し付ける。さすがにギヴ・アップを感じたローレンシアが戸口でその様子を見守っているヒューイに視線を移すと、彼は心得たようにそっとリンティアの肩を抱いて椅子に座らせる。

「ありがとう、ヒューイ」

「お安い御用だ。数日後、また送っていく」

ローレンシアは微笑んで頷いた。まさかリンティアを連れてくるとは思わなかったが、ヤンやテリーを連れてくるよりは道中疑われにくいだろう。リンティアはどこをどう見ても戦闘に向いているとはいえないし、今でもまだ「アンシアン」のメンバーといっても違和感がある。

枯れるほどに泣いたはずのリンティアは二日滞在し、またアジトに戻る日の朝にローレンシアに抱きついてまた枯れるほど泣いていた。

リンティアが何事もなく（目は真っ赤に晴れ上がってはいたものの）アジトに戻ってきたあと、テリーは丁重に札を言うと、話があるといってヒューイを近くの酒場に連れ出した。人の多いところの方が紛れるのだということも二人とも良く知っている。こんなところで誰が何を喋っていたかなど気にする者はいない。

最初の杯を半分ほどあげたところで、テリーが用件を切り出した。ヒューイはその話の内容がどういうものか、うすうす感じてはいたがまずは相手の言葉に黙って耳を傾ける。

「『アンシアン』に力を貸す気はないだろうか？」

これ以上なく率直な質問は、テリーの人柄を思わせる。騙したり嘘をついたりすることが出来ない男だ、とヒューイは口元に僅か笑みを浮かべて杯に手を伸ばした。

「きみが剣を扱えるかどうか僕は知らないけれど……でも、僕たちは剣で戦うだけが抗いではないと思っているんだ」

その主張はリンティアが象徴的となっている。武力だけではなく、大切なのは気持ちなのだということ。

「どうだろう？ 考えてみてくれないかな？」

「テリーは」

問いに被せるようにヒューイが質問を返す。

「何故、参加している？」

その質問に対するテリーの最初の反応で、彼には理由があるようだ、とヒューイは感じた。思い出したくないものを目の前に突き出されたような、困ったように視線を伏せたテリーが、ぼそぼそその理由を簡単に説明する。元々は国王軍にいたこと、育った町の状況、その町を壊滅させる命に逆らえなかったこと。

テリーには理由がある、とヒューイは考える。テリーがそのあと補足するように少しだけリンティアの話もしたが、彼女にもエストレージャを憎む理由がある。……今彼女はその憎しみよりもテリーの傍にいたいという思いの方が強いようだけれど。

「残念だが、私には国を憎む理由がない」

それは本当だった。時折剣士として遊軍に参加することはあったがヒューイ自身、国の政策に不自由を感じたことはなかったし、悪政であると断言できるだけの知識もなかった。現状で国に不満はないのだ。

「そうか……」

ふう、とテリーは溜息をつく。決起に失敗したとはいえヤンがそのまま引き下がるとは思えなかったし、ローレンシアが生きているのなら恐らくは次の計画を考えるに違いない。それなら、仲間ひとりでも多い方がいい。

しかしヒューイの言うことも理解出来る。不自由を感じていない人間に憎しみを持つというわけにもいかないし、憎むことを強制したくはなかった。

「残念だ。僕はきみと一緒に動いてみたかったんだ」

僅かな接点しかなかったが、テリーはヒューイの誠実さが好まし

かった。熱くはないが穏やかで誠実で、そして今の自分の提案に対する回答もとても公平なものだった。誘われたから、という安易な理由で国を憎むような不公平さは実はあまり好きではない。

テリーが諦めて他の話を幾つかし——それは主に、ヒューイの生活についての質問が多かったのだけれど——テリーが席を立とうかと考え始めた時だった。唐突に、ぽつりとヒューイが呟く。

「憎む理由はないが、守る理由なら、ある」

その言葉の意味をテリーが理解し、咀嚼し終えるまで数秒かかった。青い瞳がまっすぐにヒューイを見つめる。

「彼女を守るためという理由でなら、私は貴方たちに協力したい」
テリーはその言葉を頭の中で二度反芻した。彼女——つまりヒューイはローレンシアを守りたい、と言っているのだ。そのために『アンシアン』に参加してもいいと思えるほど、彼女を。

「わかった。早速ヤンに連絡を取ろう」

優れたリーダーがそれをなんと言うか……テリーには想像出来るような気がしたが、あえてここでは触れなかった。自分とリンティアと同じだ、ヒューイとローレンシア——まったくタイプの違う同士が惹かれあったことを考えると、テリーはこみ上げる笑いを堪えきれない。それが幸福だ、と、唐突に感じた。

第二十四話：同じ道を駆ける

それからおよそ十日、ローレンシアがやっと歩けるほどまでに回復した。本当はもつとかかるはずなのに、と僅かにヒューイが眉を寄せると彼女は済ました顔で「回復が早いんだ」とそっけない。なにか理由があるようだ、と感づいてはいるがヒューイは特に聞き出そうとはしなかった。

二人の生活は快適だった。過度に干渉し合わないところだけは似ていて、そこをお互いが気に入っていた。途中、ヤンから長い手紙が届き（本当は随分と頑固に本人が行くと言い張ったのだが、テリーがぎりぎりで抑えたのだった）、ローレンシアはそれを読みながら静かに泣いた。

ヒューイはその涙に気づかなかった振りをしていた。詳しくは知らないが、どうやらヤンとローレンシアはエストレージャ城を抜けるまでは同行していたらしいことはテリーに聞いていたし、その後彼女だけが倒れて意識を失っていたということは、と考えれば自ずとそのつながりが見えてくる。ローレンシアの性格や、ヤンの立場を思えば当然の選択だ。だからこそ彼女は危険を冒して自分に頼んでまで、ヤン宛の伝言をしようと考えたのだろう、とヒューイは事実に関わりなく近い推測をしていた。

「……本当か？」

抱擁を緩めるとローレンシアが珍しく驚いた表情でヒューイを見つめる。頷いて返事の代わりにし、彼女の額におやすみのキスをすると立ち上がるようにするヒューイの上着が捕まえられる。

「いいのか……何故」

よほど驚いたらしい。重ねて訊ねられ、ヒューイは立ち上がるの

を諦めるとローレンシアのベッドに腰掛けた。そして彼女の長い髪を手で梳きながら「いいんだ」と小さく答える。

そのまま、手に残る髪の先をいとおしそうに押し抱いてそっと口付けを落とすと、ヒューイは今度はまっすぐにローレンシアを見つめた。

「ただし、私は国王を倒すために戦うんじゃない。――貴方を守るためだ」

まっすぐに見つめるヒューイの明るい茶色の瞳はローレンシアの心を打つ。このひとは……あたしのためだけに戦いに身を投じようとしている、と考えると胸が張り裂けそうだった。しかしその反面、同じ目標に向かって傍にいられることを幸福だとも感じている。そう、きつとリンティアが『アンシアン』にしていると答えた時も恐らくはこんな気持ちだったのだろう。

「貴方のために戦う。私のすべてはもう、貴方のものだ」

そんな言葉が重い、と感じられないのはお互いがそれを原動力に出来るから――愛しているから、だ。相手のために生き、相手のものとなる。相手の喜びが自分のものになり、苦しみが同じように降りかかってくるのなら、自分が幸福になることが相手を幸福にするための必要最低条件だ。ヒューイは目的のために戦うローレンシアを愛した。もしも彼女がここで、愛するあまりに戦いを放棄してしまったらきつとそれは、ヒューイの望む姿ではないのだろう。

力が少し戻った腕で、ローレンシアはヒューイを抱きしめる。もう、傷に痛みは響かない。リンティアが来たときに彼女の限界近くまでの魔法を使って治癒してもらったことはかなりのプラスになっていた。

そうだ、生きなければ――無事に生きていなければ、こうしてヒューイを抱きしめることすら出来ない。

人間の――愛する相手の温もりというのはどうしてこう、何もかもを溶かしてしまうのだろう、とローレンシアは切なく思いながら目を閉じた。自分がヒューイを抱きしめている。そしてヒューイに

抱きしめられている。今はその事実だけで充分だった。未来や明日などはもはや考えられない。今はこの瞬間、彼がいて自分がいて。同じ思いをまるで鏡のように返してくれる相手が手の届くところにいてくれる。

その事実だけで幸福の理由になるのだと初めて、知った。

第二十五話：四つの塔

おおよそ二月後、ローレンシアは全快してエンテのアジトへと向かった。テリーとリンティア、そしてヒューイも同行し、ヤンとの再会を喜び合った。そしてヤンとヒューイとの初対面はニヤリとお互い、笑っただけだった。

「早速だが、現状の話からさせてもらうぜ？」

エストレージャ城内地図を広げながら灰青の瞳が全員を見回す。古びた地図に真新しいしるしがヤンによって随分と殴り書きのように四箇所、つけられた。

「なんだか建設中、だそうだ。エラいお人の考えることはよくわからねえ」

「四箇所……？ 見張り台かなあ」

「かも知れないな。多少は懲りたということか」

覗き込んだテリーが首を捻って呟いた言葉に、ローレンシアが同意を示す。

さつきヤンから告げられた今回の決起の結果は散々で、まだ命を落としたものがそう多くなかったことで救われはしたが、結局は反乱軍が潜んでいるという事実が相手にわかってしまっただけだった。相手とすれば全員の捕縛が不可能ならば、また襲来があると考えるのが妥当だろう。ロサードははつきりとヤンとローレンシアのことを見たのだから、死んだ者や捕縛した者の中に彼らがいないことは一目瞭然だ。

「コイツが出来上がる前に仕掛ける方が楽にゃ楽だが、ちっとばっか準備がキツイ。なもんで、少しばかり長期戦で行くことにしようと思う」

「メリットは」

すかさずローレンシアが訊ねた。その鋭さは相変わらずで、ヤンはニヤリと笑って頷く。

「中に数人送り込むことにする。だから次の決起は年単位で考えるのが妥当だろうな」

中、と言いながらヤンはコンコンと城の真中を示した。その意図するところは全員が理解したものの、その突飛な発想にしんと静まったままだった。

「――わたし、が、行くわ」

その輪の中で唯一、今回の決起で城へと足を踏み入れなかったリンティアが言った。当然、全員の視線が彼女に向くが、リンティアはくつと顎を引いて青い瞳を凜と輝かせる。

「無理だ」

信じられない、というように首を振りながらテリーが最初に否定する。

「きみをそんな目に遭わせるわけにいかない」

「大丈夫よ」

「きみの顔はやつらも知ってる！ 連れて行こうとした国王軍の連中に見つかったらどうするつもりだ！」

テリーの主張は当然だった。まさかとは思うが、リンティアを連れ去ろうとしていた兵に会えばすべては終わってしまうだろう。その懸念はリンティアを思うテリーだけではなくその場にいた全員が感じていた。

「リンティア」

ローレンシアが名を呼ぶと、キツとヤンを睨み据えていた瞳の色が鈍る。ゆっくりとリンティアがローレンシアを見つめた。

「相手の懷に飛び込むには、どれだけ用心してもし過ぎというものではない」

「ロージー……」

穏やかな口調で諭され、ローレンシアの細い黒の瞳が優しくリンティアを見つめ、頷く。わかっている、と――お前の気持はわかっている、とそう告げているような気がして、リンティアは肩から力を抜いた。

第二十六話：よろこびの涙

前回の決起時、戦闘に参加しなかったメンバーから選ばれた数人が、メイドや庭師や出入業者に扮して城の内情を探るようになってから数ヵ月後、ヤンはローレンシアから思いもかけない報告を受ける。

「……本当か？」

「ああ。こんなときにすまないんだが」

そのときのローレンシアの表情は本当にすまなそうに目が伏せられていて、喜びは滲み出てもしなかった。城からの報告はまだまだ時間がかかる、と、『アンシアン』メンバーはこれといって表立った活動はしておらず、城の中に作られ始めた四つの建造物が高い塔のようなものらしいとオフォスの住民が知ることが出来る程度に広まった頃だった。だから、時期が良いと言えば良い。

「かまわねえって。――リンティアには？」

「いや、まだ何も」

「あのお嬢さんのことだ、自分のことみたいに喜ぶぞ」

ニヤリと片目をつぶってヤンは言い、そしてぽんと軽く肩を叩く。報告してやれ、との無言のヤンの気持ち伝わってくる。ローレンシアはそれに深く感謝を込めて古くからの友を見つめる。

ヤンはその視線の意味を感じていた。ローレンシアを愛している。しかしそれは束縛の混ざるものではないということ――つまり愛は愛ではなくて愛なのだという事。それがたった今、わかったような気がしていた。もしかしたらローレンシアも同じように感じているのかもしれない、と僅かに脳裏を掠めるが、今のヤンにとっての最大の懸念事項は、うまれ来る子がどれだけ平和なエストレージャ国に生きることが出来るかどうか、だった。ヤンの愛は、ローレンシアの子へと増えたのだ。そしてその父となる男へも。

ヤンの予想通り、ローレンシアが報告するとリンティアは瞠目したあと大粒の涙を溢れさせた。突然の涙にローレンシアが動揺していると彼女は泣きながら抱きつき、ぎゅっと強く抱きしめた。

「ああ、ロージー！　なんて素敵なの！　あなたとヒューイの子が生まれるなんて……！　ああ、どうしましょう、嬉しくて嬉しくてなにを言ったらいいかわからないわ」

ヤンの言葉どおり、リンティアはまるでわが事のように喜び、それ以降ローレンシアの身体に最も気をつけるようになったのも彼女だった。まるでその姿は自分が母になるような——そんな幸福感を滲ませていた。

十ヶ月。エストレージャ城敷地に作られていた建造物は塔だった。見張り台というには少々つくりがしつかりとしていたし、どうやら最上階には小部屋があり、そこに窓が作られているようだった。様式は見張り台以外の何物でもないと思われたのだが、その小窓から兵士が顔を出すようなことは一切なく、一月か二月に一、二度、その塔へ入る者を制するかのように警備兵が立っていることがあった。その頃から城内に潜入した『アンシアン』メンバーから少しずつ情報が流出するようになってきたものの、塔に関する情報はまったくといっていい程なく、どうやらロサード王及び側近のみが知る秘密のようだった。城内地図は少しずつ完成に近づき、警備兵の配置場所や交代の時刻などが続々と『アンシアン』に持ち込まれていた。

第二十七話：愛の結晶

ローレンシアは、ヒューイと同じ黒髪をもった男の子を産んだ。ヤンがヒューイとローレンシアが住む家を訪れたのは、産まれてから一週間後だった。ベッドに並んだ小さな赤子に手を近づけると、子はぎゅっとヤンの指を握り締める。

「一度掴んだら離さない。誰に似たのだから……」

「随分と気の強えガキだ」

台所でコーヒーを淹れているヒューイの後姿をちらりと見ながらローレンシアは微笑む。ヤンは掴まれた指を離そうとしたが、その力の強さに諦めて椅子に腰掛ける。そこへヒューイがコーヒーを運んで来てベッドサイドテーブルにひとつだけ置く。そしてローレンシアの前には水のコップをことん、と置いた。

「ああ待て、お前さんにも聞いて欲しいんだ」

席を外そうとしたヒューイをそう呼び止め、ヤンは手招きをした。ヒューイはしばし考えてはいたが、この聡明な男のことを尊敬もしていたせいもあり、ヤンの要望通り椅子に座る。このあと何を言われるのか予測出来なくなかったが、それはすべてローレンシアが決めることだと思っていた。ヒューイ自身は、彼女を——今となつては彼女とその子を——守るために戦うことに異議はなかった。

「単刀直入に言おう。——お前さんたち、少し『アンシアン』から離れて生活してみるつもりはないか？」

ローレンシアに子供が出来たと聞いたときから考えていたことだった。ローレンシアの戦力を失うのは厳しいが、幸い『アンシアン』には反国王の思いを抱く者が集まってくる。その中に腕利きの者もあり、次の決起を考えて鍛えればなかなかの戦力になる者も数人いる。ローレンシアの国王への思いはわからないわけではないが、産まれた子にとって両親は唯一無二の存在だ。国を変えようと思うよ

りも子を、家族を守って欲しいというのがヤンの正直な気持ちでもあった。

ローレンシアはいささか驚いて目を瞠り、一瞬返答に詰まった。ヤンが自分とこの子のことを考えてくれているのは充分わかってはいたが、決起を、『アンシアン』をこのままにしておくつもりはまったくなかった。かといって子を巻き込むこともしたくない——その戸惑いは僅かな沈黙となって横たわる。

「ヤン」

ローレンシアの声は、どちらかというところ怒りの音が混ざっているようにヤンには聞こえた。それが彼女自身に向けてなのかもしれない。提案をした自分へ向けてなのかまでは推測しかね、次の言葉を待った。

「あたしは、この子に——平和な国を創ってやりたいと思っている。この現状のようなエストレージャではなく、新たなエストレージャで生きて欲しいと。そのために『アンシアン』にいると思っている。……おまえの気持ちは嬉しいが、あたしに、その片棒を最後まで担がせてくれないか」

ローレンシアの言葉は一粒一粒が重く、しっかりとしていた。ヤンを真っ直ぐに見据える瞳はまさしく戦士のもので——ヤンは一瞬、見惚れた。女としてではなく、戦士としてのローレンシアに。

「しかし……」

そこで助け舟を求めるようにヒューイを見る。しかし彼は柔らかく微笑むと、微かに首を振る。

「私の戦う理由のすべては彼女にある」

そうだった、とヤンは思い返す。ヒューイの『理由』はすべてローレンシアにあるのだ。子が生まれてもその態度は変わらない。ヒューイが何よりも愛しているのがローレンシアなのだから。

「おまえの気持ちは本当にありがたいと思っている。……すまないな、ヤン」

その瞳の色をふっと緩め、ローレンシアは視線を隣に眠っている

赤子に移した。この子が生きるエストレージャが――どうか平和な国であるように、ともう一度心の奥で祈る。

ヤンはその様子を見つめながら、それ以上何も言わなかった。そして以降、ヤンが二人の『アンシアン』参加について何か口にすることは一切、なかった。

第二十八話：計画立案

時は、満ちた。

エストレージャに密偵を送り込んで一年弱、密偵たちがそれぞれの立場で掴んだ情報がある夜を指し示す。近衛精鋭たちが王の命にてフィージャの森へ向かう夜。近衛兵はもちろんいるが、精鋭がいなければ負担は減るだろう。こんなチャンス逃す手はなかった。

城内地図は出来上がっている。ただ、あの新たに建設された塔が何を示すのか――その情報を手に入れられなかったことだけが引かかるが、仕方がない。それを待つ時間のロスと、このチャンスと、それから最初の決起から約二年近くの時間の経過を考えると選択はひとつだった。

ばさりと城内の地図が広げられる。門、入口、階段、そして王座の間――すべてがしっかりと書き込まれたものだ。

「基本は前回と同じだ。特攻チームを予備チームがサポートする」

トントントン、と侵入経路をヤンの指が追う。正門から真っ直ぐ城内へ、そして北階段。

「……が、反省点を生かそう。今回は特攻チームのルートを二手に分ける」

ヤンの指がすべる。北階段、それから……西階段。

「特攻は四人」

挙げられた名前は、前回の決起と同じだ。しかし二手に分かれたルートにヤンが名を入れていく。ヤンが西、ローレンシアが北。戦力から考えればそれは妥当だった。

そして正門をコツンと拳で軽く叩くと、ヤンは灰青の瞳をテリーへと向ける。

「予備チームも前回同様だ。テリー、頼む」

「了解」

真剣な緑の瞳が強く光る。この場にリンティアはいなかった。さすがに非戦闘員である彼女が遠慮し、代わりに子守を買って出たのだった。隣室で赤子と一緒にいるはずだったが、彼女は彼女で、テリーが再度最前線へ赴くだろうことは予想できていた。だからこそ……決定的な言葉を聞きたくなかったのかもしれない。

「ヤン」

収まりかけたその場に声を発したのはヒューイだった。

「前回の決起についての記述をすべて見せてもらった」

落ち着いた声音で続けられる言葉のとおり、ヒューイは文書で残された決起の詳細をすべて読み込んでいた。進行ルート、配置されたメンバーの数、状況、そしてルート八の発令と逃亡について。そして彼なりに考えたことがあった。

「予備メンバーの一部を、王座の間までのフロアにつけるのはどうか？」

その場の全員の視線がヒューイへと向かう。それから彼の示す城内地図へ。ヒューイの指は正門からつつつと滑り、城内から階段を上がっていく。

「そうすれば特攻チームは王座の間まで体力を温存出来るだろう」それは事実だった。もしも階段での戦闘がなければロサードとの対峙のみを考えればいい。前回はそれに特攻メンバーの三人が足止めを食らい、結局ローレンシアひとりが相對したことになった。この夜、近衛精鋭はいないという情報があるものの、城内で近衛兵に会わないとも限らない。

「……そいつもアリかもしれねえな」

「僕が行こう」

ヤンが呟けば、すかさずテリーが名乗りを上げる。ちらりとその方を見てからヤンは「いいや」と頭を振った。

「お前さんは予備チームのリーダーだ。しっかり門前を頼むぜ。――ヒューイ、行ってくれるか」

「勿論だ」

その会話はヒューイにとって予想の範疇内だった。というより、自分がローレンシアを守るために傍にいたかったからそれは当然のことだ。ヒューイにとっての戦いはすべてが彼女のためである。「もうひとり、オレの方のフォローはあとでお前さんに頼む。どっちにしろ、予備メンバーからひとりいただくからな」

第二十九話：未来への約束

前回、テリーが簡易的に作成した方が一のための逃亡ルートは今回完全に整備され、『アンシアン』メンバー全員が何らかの逃亡ルートを持つことになった。リンティアはやはりエストレージャ城に最も近いアジトに潜むことになり、今回は素直に納得してローレンシアを安堵させる。

「あら、わたしだってそんなにわからずやじゃないわ？」

「いや、わかつてはいるがな」

リンティアから子を受け取りながらローレンシアは苦笑する。前回、随分と説得に時間がかかったことを思い出していた。リンティアもそれは同じだったようで、ちょっと頬が、赤い。

「でも……ロージー、あなた本当に参加するつもり？」

僅かに眉を寄せてリンティアが声を潜める。その言外に腕の中の子供のことを言っているのはローレンシアにもすぐわかった。

「当然だ。それがこの子の為でもある——あたしがやらずにどうするんだ？」

両手で赤子を高く持ち上げると彼は声にならない笑みを漏らし、リンティアとローレンシアはつられて微笑む。リンティアはちらりとその横顔を盗み見た。

ローレンシアの雰囲気はひどく柔らかくなった。ここ二年ほどは剣士よりも母である時間が長いからかもしれないが、リンティアにとってはその母の雰囲気が好きだったし、それを守りたいと思った。自分よりもローレンシアはずっとずっと力もあるのに、とリンティアは淋しげに笑う。けれど、母としてのローレンシアは尊敬する剣士ではなく母として、女として同じ立場にいる相手として身近に感じていた。

「そんな顔、しなくていい。——大丈夫だ」

ふわり、とリンティアの髪をローレンシアの手が撫ぜた。まるで

子供をあやすようなその仕草に、リンティアは僅かに拗ねたように頬を膨らませたが、内心はホッと慰められていた。

「ただ、リンティアに頼みたいことがある」

「ええ、なにかしら」

その手をそつと外してから、ローレンシアはきゅつと表情を引き締めた。真面目な視線に見つめられ、リンティアも背筋を伸ばした。「この子を――頼みたい。あたしとヒューイの命を、預かって欲しい」

ローレンシアの指がふつくらとした頬を撫でる。くすぐったそうに笑う幼子の手に、リンティアが人差し指を近づけた。きゅ、と小さな五指がそれを掴む。強い力で。

その仕草を見つめていたリンティアがふつと笑みを浮かべ、そしてローレンシアを見返す瞳は凜とした輝きが浮かんでいた。

「ええ、責任を持って預かるわ」

約束ね、と言いながらリンティアは掴まれている指を上下に揺らす。

いくつかの約束が、次の決起には絡まっている。すべては明るい未来のため――

幼き赤子が平和な国に生きることが出来るようにと、ただそれだけを願って。

ある者は未来の幸福のために。

ある者は愛する者のために。

ある者はいとおしい者たちのために。

ある者は切ない約束のために。

そしてある者は、輝かしい未来を信じて。

二度目の決起はそれから一週間後、半月の夜のことだった。

第三十話：決起、再来

ばかりと浮かぶ半月の夜。『特攻チーム』のスタートは前回と同じ場所から、だった。ただし今回はすべてのきっかけをタイムカウントしている。『特攻チーム』が正門に近づく少し前に騒ぎが起くる予定だ。テリーとヒューイはもう、エストレージャ城近くに待機しているだろう。

「――時間だな」

ヤンの声はいつも、気負いもなく柔らかだ。いつもどおりの声が闇に響き、四人の足が一気に駆けはじめる。しばらく進むと四つにルートが分かれた。また門前で合流するのだが、城内に入るまでに相手に動向を探られないようにするためでもある。

ローレンシアは駆けながら我が子を思った。今朝ほど、オフオスのアジトへと向かうリンティアに預けたあの温かさ。そして彼女が妙に真摯な表情で自分を見返したこと。

「ロージー、必ず、この子を迎えに来てね」

いつものリンティアらしからぬ低い声で彼女は言いながら、その胸に赤子を抱きしめる。それからリンティアはちらりと周囲を気にし、ローレンシアの耳元に唇を近づけた。

「三人で、待ってるわ」

三人、と意味深に告げられたその意図をローレンシアは数秒考え、そしてはっとして視線をリンティアの腹へと向ける。その視線の先へそっと手をやるリンティアは、恥ずかしげに微笑み、人差し指をすいと唇の前に立てた。

「――そうか。わかった、必ずだ」

新たな命が生まれようとしていることは、ローレンシアにとって大きな力になった。幾重にも重ねられた約束を果たすべく、彼女は

城へ向かって駆けつけける。

予定通りの時刻に、エストレージャ城近く三箇所で火の手が上がった。闇にオレンジの柱が時折大きく走り、街はざわめき始める。ここからは慎重に。見つければ面倒なことになる。せっかく国王軍の目を逸らすために動いてくれているチームメイトの思いが無駄にならないように。

正門まで後少しの場所には既に『特攻チーム』の三人がローレンシアを待っていた。彼女が合流すると同時に正門へ向かって駆け出す。その後ろから黒い影が二つ、ついてきた。

門に入るまでは予備チームが完全なるフォローをした。テリーの采配はさすがで、剣を抜かなくともその場を通ることが出来、ヤンはその見事な仕事振りに僅かに瞠目した。こいつはいけるかも知れねえ、と後方ついてくる二つの影にちらと視線をやってから西階段へと向かう。ここからは分岐ルートだ。ローレンシアは北階段へと向かう。

狭い北階段と違って西階段は警備兵の数も多かった。フォローにひとりついたとはいえ、ヤン自身も剣を振るわなければそこを突破することは出来そうになかった。チ、と舌打ちをして剣へと手を伸ばせば、同行ルートを辿る特攻チームの男がそれを押しとどめた。

「ここは俺たちで。――王座の間へ！」

多くの同胞たちの思いが、ヤンのルートを拓けてくれる。出来れば四人で、と思っていたが近衛兵の剣の数は予想以上で、その願いは通じそうに無い。

「オーケーイ、頼んだぜ！」

階段での攻防を二人に任せると、ヤンは上へと駆け上がる。近衛

兵はバラバラと降りてくるが、倒すことよりも先に進むことを優先したヤンを足止めするには未だ足りない。

第三十一話：笑顔の裏の恐怖

北階段は予想通り警備が薄く、ローレンシアたちはヒューイのフオローを得て予定どおり着実に駆け上がっていった。出産、育児を経たとは思えぬほどローレンシアの剣は衰えておらず、むしろ逆、大切なものを守るための剣を振るうローレンシアはまさに戦いの女神、軍神マルスのようだった。ヒューイはそんな彼女を誇らしく思いながら、彼女を守るための剣を振るう。

あと半分——王座の間まで、永く待った瞬間まで、あと階段半分だ。ローレンシアの瞳はいつでも、進む先を見つめていた。

近衛兵が上から下からと攻めてくる。情報どおり精鋭たちの姿は見えない。近衛レベルならば慎重に相對すれば問題なく進むことが出来た。人数は多かったが、それでも北階段を上がる三人の前に鋼の壁とはなりえない。

最初に最上段を踏んだのは特攻チームの男だった。短剣と拳を操る男は接近戦を得意としており、近衛兵の懷に飛び込んで倒していった。その男が最上階を踏む。

「ローレンシア！」

伸ばされた手を反射的に掴むと、力強く引っ張り挙げられた。思いがけず空を飛んだようになって近衛兵たちの追隨が遅れる。

「ここはいい、行け！」

叫びながらも男は既に手近な兵士へ向かって駆けていた。ローレンシアは迷わずに踵を返し、その向こうにある扉を目指す。そうだが、あの扉——数年前も同じ光景を見た、と近づいてくる最終の場へと手を伸ばした。

『特攻チーム』を城内へ送り込んだあとの予備チームの仕事は退路の確保だ。テリーは的確に、予定通り正門から一時的に引き上げ、西門のチームを攻めさせる。近衛兵を退路ルートから逸らせることが目的だ。

城を見上げる。所々から明かりが漏れてはいるが、争う音はここまで聞こえては来ない。あとテリーに出来ることはどうか無事に、と祈るばかりだった。

「――っ……！」

隙があったことはテリー自身も認めるだろう。しかし既に正門から引いた距離にあり、まさかここまで兵に追われるとは思わなかったのが油断だった。斬り付けられた左腕から生温かい液体がぼたぼたと零れ落ちている。痛みは数秒あとから襲ってきた。目の前にはその伝達を待ってはくれない兵士が次の太刀筋を振り下ろそうとしている。腰に収めた剣を抜き切る余裕はなかった。それだけは刹那で計算が間に合う。

しかし人間の脳というのは局地に立たされると素晴らしいもので、テリーの脳裏には一瞬にしてヤンやローレンシアの顔が過ぎった。そしてリンティアの笑顔も。そうだ、彼女の笑顔を守るために僕は戦うのだ――テリーの心に死への恐怖が生まれたのは、その瞬間だった。

第三十二話：対峙する国王

思いのほか扉は重かった。以前よりも重厚になったのだろうか、と考えながらローレンシアは一気に扉を引いた。最初にガタリと音を立てたあと、厚い絨毯の上を音もなく重い扉が滑る。真正面、最奥の窓の手前にシルエット。

「……ローレンシア、ウォーディート」

彼女が何か告げるより先に、シルエットが口を開いた。椅子にかけたまま、指一つ動かさず。フルネームを呼ばれたローレンシアは開けた扉の中央で大きく肩で呼吸をする。

「ウォーディート卿の長子であり女性初の近衛兵。二年半前、任務中に落馬しルシア海に落ちて死亡。——おまえは、亡霊か？」

その声音は真実を知っている、とローレンシアは思った。恐らく前回の決起のあと調べさせたのだろう、と考えてゆっくりと奥の執務机に近づいていく。

「あなたの質問に答えよう。——国が生きるために必要なのは、良き指導者と、信頼する民たちだ」

ローレンシアの言葉に、シルエットが初めて揺れる。小刻みに揺れるそれが笑いによるものだと思いついたのは逆光の中で表情が読めるほど近づいた時だった。

「信頼、だと——？ 愚鈍さを愛せというのか。何もかもを許すのが愛だというのなら、そんなものは愚の骨頂だ」

「弱き者を踏み潰す指導者はいずれ、民たちに裏切られるだろう」
「構わぬ」

即答に、ローレンシアは足を止めた。構わぬ、だと——？ 民の信頼を得ずに国が成り立つはずもない。裏切られても構わないなど、そんな乱暴な指導者が国を率いているというのか？

「私は国を背負っている。誰を踏み潰したとて、私が守るのは国だ」
「民のいない国か！ 民が皆、あなたを憎んでいても国を守ったと言えるのか?!」

「愚かなローレンシアⅡウォーデイト。すべては国ありきだ。民は裏切るが、国は裏切らぬ。私が守ればその存続は約束されるのだ」
いつのまにか笑みは消え、緑の瞳がぎらりとローレンシアを見据えていた。王者の風格というものがまるで獅子の鬣たてがみのようにロサードを包んでいた。声は重く、喉の奥にびっしりと砂を流し込まれたようだった。ローレンシアはそれに気圧されぬよう立つのが精一杯だった。

違う。ロサード王の言葉はどこかが違うのだ、と強く思うもそれを言葉に出来るだけの力が彼女には足りなかった。それが才覚の違いなのかもしれない、とローレンシアは目の前の男を認めていた。

しかし、ここで負けてしまうわけにはいかなかった。言葉で理解し合えないのなら、と剣を構えればロサードはちらりと視線を動かしただけでまた、笑みを唇の片側にだけ、浮かべる。

第三十三話：彼女のもとへ

西階段は難航していた。やはり北と同じかと思っていたのが油断だったのかもしれない。下から上から近衛兵が溢れてくる。精鋭でないかもしれませんが、とヤンは自分を慰めながら剣を振るう。

ローレンシアはもう王座の間へ着いた頃だろうか、と思う。今回は彼女に任せてしまうわけにかなかった。最初の決起と同じ道は辿りたくはない――今ヤンが考えるのはそれだけだった。そのためには自分があのでっぺんにたどり着かなければいけない、とヤンは上を仰ぎ見る。

「――援護しろ！」

叫んだ言葉を、仲間たちがどれだけ聞く余裕があるかどうかかわからない。特攻チームの男もフォローに入った予備チームの男も手一杯なのはヤンが見てもわかっていた。それでも先に進むために、とヤンは上から降ってくる剣をかわし、足を払い、切っ先を向ける。何もかもが特攻チームのためのお膳立てだ。自分が動かなければすべてが無に帰してしまう。

歯を食いしばり強引に階段を上がったヤンの背中から、熱さと痛みが同時に走った。振り向けば血塗られた短剣が目に入る。そのまま剣を向ければズキリと重い痛みが右腕に走り、一瞬取り落としそうになる。

「ヤン！」

仲間の声がこれほど救いと思うことはないだろう。次の一太刀を待つ前に、ヤンの目の前の兵士がドサリと倒れ込んで階段を転げ落ちていった。

「サンキュー」

「礼はいい、急げ！」

仲間の声に背中を押されて、ヤンは走り出す。しかし背中痛みとそれから背を伝う生温い感触は治まらなかった。時々意識を手放

しそうな痛みの中、最上階へと踊り出る。

ローレンシアを王座の間に送り込んだあと、北階段では特攻チームの男とヒューイが二人で近衛兵に相對していた。剣の腕は近衛兵より二人の方が上だったが、その数で相手は勝っていた。それがきっかけになったとしてもさほど不思議ではなかった。

ローレンシアを最上階へと送り出した男は長剣に間合いを取られて傷を負い、致命傷ではないとはいえ少しずつ動きが鈍くなっている。ヒューイはそれを横目で見ながら撤退させるタイミングを見計らっていた。あまり早過ぎれば反発されるだろうし、遅くなれば取り返しがつかない。どこで見極めるかは難しい。そう考えるのと同じ時にローレンシアのことも気にかかる。彼女の強さを――精神的にも肉体的にも信じてはいたが、自分の目で見守っていないのは、不安だ。

キーン、とひととき高い音と一緒に何かが階段を落ちていく金属音。振り返らなくても、その音の軽さで短剣だとわかる。そして近衛兵はすべて長剣を腰に下げている。で、あれば。

一瞬の判断で、ヒューイは男をフォローするために無理に身体を捻る。足首に余計な力がかかったのを感じたが、そんな痛みなど刀傷に比べれば軽い。特攻チームの男が、避けきれなかった傷を右腕に深く追ったのがヒューイにとってのきっかけだった。

「……予備チームに合流したほうがいいだろう」

男はしばらく無言だった。自分に課せられた使命を再度胸のうちに反芻しているだろう事は容易にわかったのでヒューイはそれ以上は言わず黙ったまま剣を振るう。

「あとを、頼む」

男のか細い声が聞こえたのはそれから数分後、だった。

取り落とした剣の代わりに倒れた近衛兵から長剣を拝借すると、男は利き腕とは逆の左手でそれを振り回しながら今上がってきた階段を下りていく。

どうか、あまり怪我を負わないうちに予備チームと合流出来ればいいが、と考えながらヒューイは上を目指した。ローレンシアの許へと。

第三十四話…神に祈りを

決起が開始された時刻からずっと、リンティアは闇夜の向こうに見えるエストレージャ城を見つめ、指が白くなるほどにその両手を握りしめて祈りに捧げていた。唇を噛み、じっと身動きせずにいる彼女の沈黙を破ったのは赤子の泣き声だった。

火がついたようと形容するのが相応しいと思えるほど高い泣き声が唐突に上がると同時に、リンティアのみぞおちの奥の方を貫くような痛みが一瞬身体を駆け抜ける。痛みに閉じられた青い瞳はすぐに泣き声をあげる赤子へと向けられるが、彼女が駆け寄ると赤子は何もなかったかのように泣き止んで、布団の中からリンティアを見上げた。彼女は胸を押さえたままだんだんとその表情を固くしていく。

今の胸の衝撃と、この子の泣き声と——悪い想像ほどぐんぐんと育つものだ。リンティアのぼら色の頬はその赤みをまったく失って陶器のように青ざめる。

「……テリー……」

それ以上の言葉は紡げなかった。まさか、という思いに右手は胸を押さえ、左手は叫び声を押し止めるかのように喉に押し当てた。悪い予想に取り付かれたまま、彼女は床に膝をつく。

どうか……どうか、神よ在らせられるのなら、あの方をお守りくださいますよう——

大きな青い瞳から涙粒が次々と溢れて落ちる。強く噛みしめていても唇が震えている。胸へ押しつけられていた右手は拳を作り床に叩きつけられる。そのどれもが、自分自身への憤りを表していた。リンティアは今ほど、自分の非力さを疎んじたことはなかった。過去、治癒魔法を持っていながら何も出来なかったことは幾つもある。

り、その都度自分の力の無さを憂えてきた。しかしこの瞬間に比べれば小さなことだと思えるほど、彼女は遠いテリーを思う。

出来るならば我が身を挺してでもお守りしたかった。もしも次の決起があったなら絶対に離れまい、と固く心に誓っていた。

第三十五話…優雅な剣戟

ローレンシアの向けた切っ先を、ロサードは余興でも見るかのよう
に楽しげに笑う。

「無理だ。貴様などに私を倒せるような力はない」

ロサードは一向に椅子を立とうとはしない。ローレンシアは剣を
構えたまま間合いの外側をじりじりと、障害物が無い方向へと進む。
ロサードの余裕ぶった笑みがひどく彼女を苛立たせていた。

執務机の真横で動きを止めても、ロサードは横目で彼女を見るだ
けで、立ち上がるうとも剣を抜こうとしなかった。それでもこの
王の腕をローレンシアはよく知っている――前回、瀕死の重傷を負
わされたのだ、さすがに警戒するに決まっている。腰の位置に携え
ていた剣へロサードが手を伸ばす。しかしその動作は軽く、腰ベル
トから鞘ごと外すと無造作に執務机の上に置いた。ゴトリ、という
重々しい音が響く。

ローレンシアはあっけにとられてその一部始終を見ていた。最初
剣に手が伸びた時はさすがに緊張したが、その後のこの様子はいつ
たい……？

「貴様など、剣に頼らずとも」

そしてゆらりと立ち上がるとローレンシアを斜めに見てもう一度
にやりと口角を上げた。

その瞬間、ローレンシアの背中を悪寒が走る。相手は丸腰だ。剣
を向けられているわけでもない。それなのにこの殺気――ぞくり、
と冷たさの中に放り込まれた彼女の判断能力が一瞬でパニックにな
ったのも仕方ないだろう。ローレンシアはくつと顎を引くとそのま
まロサードへ向かって斬りかかる。

その動きは大振りで、ロサードはやすやすと軌道を避けた。そし
て空を切った身体のバランスを整えるよりも早く、一瞬縮めた右脚

を勢いよくローレンシアの脇腹にめり込ませる。柔らかい肉が痛みをストレートに内臓へと伝えるのと同時に、蹴り飛ばされて身体が壁にぶつかってじんと痛む。身体を起こして睨みあげれば、ロサードは楽しそうに笑んでいる。

「私は情けをかけるのは好まぬ」

「承知している、そんなこと」

ローレンシアは咳き込みながらもそう毒づいた。事実、ロサードの政は情け容赦がないのは承知していたし、それが反乱軍たる所以^{ゆえん}でもあったのだから。

「愚かな女だ、私の言葉を良く考えろ」

すい、とロサードの表情から笑みが消える。そして非常にゆっくりとした動作で執務机へと向かう。ローレンシアに背を向けて。彼女は大きな隙をわかつてはいたが、剣を手にする気になれなかった。ロサードが次にどんな行動に移るのかをただ、見つめていた。この王はその政の非情さはともかくとしても、人を惹きつける力が強いのはこの瞬間、ローレンシア自身が感じていた。

ロサードの右手は壁にかけられた飾り剣のひとつを手にする。そんな僅かな仕草さえローレンシアは目を逸らせない。彼の手が装飾の施された鞘から剣を抜き、くると彼女を振り返るその姿を優雅だと感じもした。

「貴様に情けをかけぬ、と言う意味だ――わかるな？ 反乱軍の愚か者」

真顔のロサードは美しかった。剣がきらりと月光を反射させる。ローレンシアはゆっくりと壁伝いに身体を起こす。ただそれだけの動作のひとつひとつが、爪先から頭のとっぺんまでを剣で突き通されるような激しい痛みを感じさせる。

第三十六話：貫かれた痛み

痛みは貫かれた。テリーはその激しい痛みがどこから起こっているものかを考える間もなく、ただ反射的に至近距離にある相手の身体を蹴り飛ばしていた。

「うっ……く……」

焼け付くような痛みがテリーの左腕を麻痺させていた。込み上げそうになる痛みの叫び声を必死で抑えて腕を見れば、そこにはまだ深々と剣が刺さったままだ。ちり、ともうひとつ左胸に小さな痛みを覚えて見下ろせば、貫通した剣の先が僅かに傷つけたらしいそこから少しだけ赤い粒が地面に零れた。

そちらは問題ない、まずはこっちだ――と、テリーは腕に刺さったままの剣の柄をそっと握る。抜いてすぐに止血すれば斬り付けられるよりも軽い傷で済むだろう。

心臓の代わりに串刺しになった左腕に感謝を込めて、テリーは剣を引き抜いた。そしてカランとそれを地に落とすと布でぐるぐる巻きにする。痛みは当然彼の身体を貫くが、命の代わりと思えば耐えるのは容易かった。じわりと布の向こうから赤い染みが広がりつつ、ある。

正門から離れているテリーの視界に、妙に慌しくなった正門が見えて目を凝らした。正門にいたはずの予備チームは全員一時撤退していた筈だった。西門での騒ぎが大きくなりつつあるのは気配で感じていたが、何かあったのだろうか？とテリーはそっと移動を始めた。その足がびたりと止まったのは、門から出てこようとして国王軍と剣を交えている男を見たときだ。見覚えがあるところではない、ローレンシアと一緒にの筈の特攻チームのひとりだった。思わず駆けようとして、つい動かしした左腕の痛みに釘付けになる。……これじゃ助けにいくどころか足手まといだ、と唇を噛んだとき、予備チー

ムの仲間が数人正門へ向かうのが見えた。テリーの指示ではなく、彼らは彼らで特攻チームの男を助けようとしたのだろう。今のテリーにはその独自判断での行動がありがたかった。

「何かあったんじゃないけいど……」

城の上部を見上げてそう呟く。ローレンシアのフォローにヒューイをつけていて本当によかった、と安堵しつつも何か嫌な予感を覚えざるを得なかった。

ズキズキと脈打つ傷を背中に抱えたまま、ヤンは真っ直ぐに王座の間へと向かった。扉は閉まってはいるが既にローレンシアが向かったことはそこへ続く廊下でわかった。重い扉を開くときに背中に温水をかけられたような嫌な感触が伝ったが、ヤンはかまわずその取っ手を引いた。

まさに目の前で、ロサードがその手になる剣でローレンシアを貫くところだった。一瞬、ヤンは自分が何を見ているのかわからない錯覚に陥る。なんだ、これは？ 何が起こっている？ これは――つくりもの、か？

急に心臓がドクドクと高くなり始める。その動悸の早さが動揺なのか傷のせいか出血のせいか、考えることもままならなかった。

ローレンシアの長い髪が揺れて、床にゆっくりと倒れこむ。音も無く、妙にスロウな場面だ。ロサードが持っている銀色が妙に、紅いのが目に付く。

敵が武器を持っている、という簡単な図案に対してやっとヤンの頭が回り始める。否、彼の頭よりも身体の方が先に反応し、体勢や状況を考えるより早く床を蹴っていた。痛みはもはや昇華し、ヤンはいまやロサードしか見えなかった。

キン、とヤンの剣は弾かれる。ロサードの動きはそんなに早くなかったはずなのにやすやすと避けられてヤンは再度横薙ぎに剣を振

るう。それはさらりと後方に避けられてますますヤンの憎しみを煽る。

「貴ッ様……！」

「無駄だ、ということに気付かないのか、愚かな」

ヤンの剣はロサードに届かない。それは彼が動揺しているせいなのかロサードの腕のほうかはるかに上なのかはわからない。けれどもヤンの息は上がりかけ、激しい動きのせいで出血は止まることが無かった。

「――ヤン！」

そんな声で僅かにヤンは冷静さを取り戻す。闇雲に剣を振るうことをやめ、肩で大きく呼吸をしながら切っ先をロサードに向けたまま睨みつけた。その視線の先に立つ男は一向に怯むことなく静かに見返していた。

「……ローレンシア」

近づいてきたヒューイの声が低く、名前を呟く。はっと息を吞むような気配。そしてヒューイは倒れたローレンシアを抱き起こし、その胸に刻まれた傷と、脈を診る。

第三十七話…誰が愚か者だろうか

「愚かな者ども」

静かにそこに響いたのはロサードの声だった。ヤンは二人が気になったが視線を外さずに睨み続ける。ローレンシアの傷は気になるが、決起がここでまた失敗に終わるのだけは避けたかった。この状況では、ローレンシアはともかくも決起が成功——つまり、ロサードを倒すことが出来なければ自分たちの命もないだろうことを感じていたせいもある。

「貴様が最も愚かだ」

動悸を堪えながらだと、随分と押し殺した声が出る。憎しみに満ちたともいえる声で、ヤンは続けた。

「濁った目でしか物が見えねえのか、てめえのことばかり考えてンじゃねえぞ！」

悲痛なその叫びを、ヒューイは迷う思いで聞いていた。ローレンシアの傷は深く、早く医者に見せなければいけない状況だ。鍛えられている彼女だからこそもっているが、樂觀は出来ない。

しかし現状でここをあとにして医者に向かうことをローレンシアがどう思うか、がヒューイにとって大切だった。彼女を守るために戦うと以前テリーに言ったことは事実だが、それは彼女の肉体も精神も、のつもりだった。身体を救うために例えばここをヤンに任せて撤退する選択もあるが、それは彼女の精神は救えない。ローレンシアを救うためには——決起を成功させることだ、とヒューイは手早く止血を終えて立ち上がる。

ヤンが目で彼女の容態を問うてくるのがわかって、ヒューイは真顔でじっとそのままヤンを見つめた。大丈夫だと頷くことも、駄目だと首を振ることもしなかった。その表情で、恐らくヤンは感じ取るだろうと信じていた。

「私がこの国の王だ。王が国のことを考えて何故悪い？」

ロサードの声は冷ややかだった。その視線はヤンと、それからゆっくりと立ち上がったヒューイに向けられる。至近距離でロサード王と初めて対峙したヒューイはその瞳を随分と空虚だ、と感じた。現在の自分にどこか満足しきれていない、そんな印象を僅かに受ける。

しかし考えている余裕はなかった。ローレンシアの傷は一刻を争う。ヒューイがするりと引き抜いた剣に、ロサードの視線がほんの少しだけ、移った。

「……愚か者たちだ」

その言葉が、ヤンとヒューイがロサード王の声を聞いた最後になった。構え直しもせずにロサードはタンと床を蹴ってヤンに向かう。その手の短剣がヤンの上着を切りつけ、肌にうつすらと傷をつける。そして軽やかに着地するとヤンの振る剣を避けてそのまま足のばねだけで今度はヒューイへと飛びかかる。攻めようとしていた剣を咄嗟に防御に回すも避けきれず、ヒューイの頬を掠めた。

まるで舞のようなその一連の行動に、ヤンもヒューイも思わず目を奪われる。早かったわけじゃなかった。なのに――何故か動けなかったのだ。ただただ、ロサードの手になる刃が自らを傷つけるさまを見守っていたような、そんな不思議な感覚。とろりと固まりかけた空気に包まれているような、そんな気分だった。ロサードだけが、その妙な抵抗に縛られずやすやすと動いてるような。

ヒューイより早く、ヤンの身体が動く。それでもロサードの動きにはかなわない。ヤンの大きな剣は空だけを切り、その勢いでバランスを崩した彼の背中――既に紅く染まっている――にロサードの剣が深く切りつけるのをヒューイは動かない身体をもどかしく思いながら見ていた。その後、彼の大きな身体が床に倒れこむことも。それは、ヤンが『アンシアン』を立ち上げてから初めてのことであった。

「――ヤン！」

その名前を呼ぶだけが、ヒューイにとっては最大限だった。ロサードの刃はそのままヒューイの喉元を狙ってくる。避けるにはあまりにも早い動きで、首に一文字の傷がつく。そこが切れたか切れていないかを確認する間もなく次の太刀がヒューイの左胸を狙う。やつのことでヒューイの剣がキインとロサードの剣を弾き、その軌跡をほんの少しだけ逸らす。

しかし切っ先は空を切ることはなく左胸から上へとずれ、左肩にぐざりと嫌な音がする。同時に鉄分の臭いがぷんと鼻を刺激した。痛みは、そのあとからだ。

ざくり、と剣が抜かれる音までもがご丁寧にヒューイの耳に届く。生温かい血の温度が左肩から胴へ向かって伝い落ちた。痛みというよりは気が遠くなるようなふわりとした感覚に包まれる。

「ヒュー、イ！」

搾り出すようなヤンの声が無かったら恐らくは、ヒューイはそのまま意識を手放していただろう。けれどヤンの声は彼の魂を揺さぶるかのようにヒューイを覚醒させた。甘い白い靄に包まれることを拒んだヒューイはその次の瞬間から鼓動と一緒に刻まれる痛みに耐えることになる。

ヤンが立ち上がったのが奇跡のようなものだ。大きな背中が赤にしか見えず、大きく呼吸をしながらも恐らくはその上下によって生ずる痛みに耐えているのがわかる。それでもよろりとロサードに剣を向ける気概はさすがだった。ヒューイはそれをぼんやりと眺めつつ、自分がローレンシアを抱えて走ることが出来るかどうかを疑っていた。

ロサードは剣を空で軽く振り、その銀色を染めた血潮を振り捨てる。その表情はまったくなく、ただ緑の瞳がヤンたちを見据えているだけでそこには憎しみも悲しみも感じられない。そしてよろりと揺れる身体を起こそうとする二人に対してそれ以上剣を振るおうとはしなかった。

ヤンは、自分の身体が今どんな状態なのか良くわかっていた。次にこちらから仕掛ければ恐らく命は無いだろう。そして――ロサードの様子からすればどうやら奴さん、オレたちに止めを刺す気は無いようだ――そう考えて、次の行動をとる。

「ヒューイ、ロージーを連れて行け」

言うとなんは剣をロサードへと向ける。さっき目の前で倒れて以来、ローレンシアは微動だにしていなかった。ヒューイもヤンの問いになんとも答えなかった、つまり危険な状態には変わりないということだ。チャリ、と柄の鳴る音にヤンは意識して剣を持ち上げる。格好だけにしか過ぎないが、それがヤンの思いだった。

ローレンシアを抱きかかえたヒューイは、彼女の蒼白な顔を見つめる。がくがくと震え始めてしまいそうな左腕に力を込めればどくりと肩から新しい血液が零れ落ち、ローレンシアの足までも紅く染める。

王座の間を出ると、あとからヤンが駆けて来る音が聞こえた。ヤン、貴方だってもうそんなに動けない筈じゃないか――とヒューイは薄れそうな意識を掴む傍ら、彼らを守って階段の近衛兵へ切りかかるヤンの血に染まった背中を見つめていた。

第三十八話…託された任務

ヤンが退路に選んだのは西階段だった。まだフォローメンバーがいるのを知っていたこともあり、それはあとから考えれば非常に冷静な判断だったと言えるだろう。事実、ヤンたちの壮絶な姿を目にした男たちは何かを言われるまでもなく撤退のルートを取り始めた。

「ヤン、頼みがある」

ヒューイが低い声で言ったのは、予備メンバーが兵をバラけさせてくれていたおかげで安々と城敷地を出ることは出来たが、追っ手に追われているときだった。

「あとにしろ」

「ヤン」

ヒューイの声はいつもどおりで、ヤンはそれが嫌な予感だと感じていた。ローレンシアとヒューイはある意味似たもの同士だ。きつと彼女が今ここで意識があったなら、やはり彼と同じようにいつでもどおりの声で言うだろう――『別行動を取らないか』と。

「別行動を取ろうと思う」

ヤンの予想と寸分変わらない言葉がヒューイから発せられる。聞きたくない、と眉を顰めるがヒューイは淡々と続けた。

「私たちが追っ手を引きつける。だから貴方は」

「っざけるな！」

たまらず、ヤンは叫んだ。その行為は傷を疼かせたが、それよりも何よりもその先を聞きたくなかった。

「オレにまた裏切れてか?! オマエたちを囷にして、オレが生き延びろってか！」

聞きたくなかった言葉、そしてそれが本当に意味することを自ら口にすることで、相手に言われるよりもまだ、良かった。強く拳を握って、ヤンは激情に耐える。

「その、通りだ。――すまない」

ヒューイの声は憎らしいほど冷静だ。もしも自分が奴を殴ってやる体力が残っていたらここでブチのめしてやるのに、とヤンは奥歯をぎりりと噛み締める。

「貴方もわかつているだろう」

何をだ？ 何をわかれて言うんだ？ ――ヤンはその言葉の真実を知りながらも、心では受け入れられるはすも無かった。わかるわけがねえ、オマエたちがもう保たねえだなんて、オレは絶対に信じねえ。二度と裏切るような真似なんざ――

「貴方には生きてもらわないと困るんだ」

「オマエらだって同じだっつーの！」

「貴方に頼みたいんだ。あの子のことを」

ヤンは一層歯軋りをする。視界が滲むのは血が目に入ったからか、と思ったがそうではないようだった。悔しさがヤンを支配して、握り締められた拳が白くなるほどだった。

「てめえのガキならてめえで面倒見ろ」

「貴方と――テリーには感謝しても仕切れない。私に、最後まで彼女を守らせてくれ」

ヒューイの言葉は温かかった。この期に及んでも悲壮感はなく、ただいつもの彼のままだった。何かを覚悟しているというよりは、ただ今日別れるだけのようなそんな軽さを含んでいる。それがヤンにとっては酷くローレンシアに似て、見えた。

そうだ、オマエが愛した男だものな、ローレンシア。

幼き頃より、まるで妹のように一緒に育ってきた彼女を、ヤンは最も愛していた。女性として、戦士として、仲間として、そして家族として。

ちらりと振り向くがヒューイに抱かれたその横顔は蒼白で、いつもの意志の強さを象徴する黒い瞳は見る事が出来ない。輝くような金に近い茶色の長い髪が紅く汚れて揺れていた。

恐らく、その瞳が意志を持っていたらきっと今のヒューイと同じ

ことを言うだろう、とヤンは思った。そしてヒューイも彼女を守るために――それは主に彼女の意思を、だ――それに同意するだろう。その二人の意志に自分が打ち勝てるかを考えれば、答えはすぐに出る。

「……わかった」

「ありがとう」

ヒューイはそこまで、温かい声音で告げるとするりと事務的に変わる。

「この少し先、右手に廃屋がある。私たちはそこへ逃げ込む」

「……オーケイ」

ヒューイの考えていることがなんとなくわかったが、ヤンは意識的にそれを考えないようにした。これはある意味『任務』だ。オレに課せられた、ローレンシアとヒューイからの『任務』。――随分と厳しい指示だけだな、とヤンはこみ上げそうになる思いを堪えて駆け続けた。背中 of 傷など、今となってはどうということもない。

右手前方にそれらしい廃屋が見える。ヤンはルートを左側へと変えながらひとつだけ心に誓っていた。後方の気配が徐々に右へとずれ、追っ手を引き付けるためにがさがさ必要以上に音を立て始める。その物音がそろそろ届かなくなるころだと思ったとき、ヒューイの声がヤンの耳に、届いた。

否、その声はローレンシアのもののようにも聞こえたが、ヤンは振り返るまいとの誓いを破らなかった。

「あの子に伝えてくれ、愛していると――ハロルドに」

第三十九話…命あればこそ

ヤンを追う足音はそれきり無く、オフォスのアジトにたどり着くことが出来た。ロサードは今回は前回よりも深追いしなかったように、各所のアジトはさほどダメージを追わなかった。

逃げる『アンシアン』メンバーを追っていた国王軍は追い詰めた廃屋へと仲間を集め、一網打尽にしようとしたところを突然の崩壊と炎上で多くの死傷者を出したと聞く。そのために救われた『アンシアン』メンバーも多かった。

二度の決起の失敗は『アンシアン』を解散させた。ヤンは仲間たちによくを語らず、ただ伝令をしただけで姿を消した。『アンシアン』メンバーはそれをリーダーの責任放棄だとか散々言い、もしかしたらローレンシアをヒューイに取られたからじゃないかという憶測による中傷や、今回の決起で実は全員死んだのではないかなどという無責任な話までが飛び交って建て直すのは不可能だった。

真実を知っているのはテリーとリンティアだけだった。しかし彼らはそれを訂正するつもりは無く、ただただ、ヤンに言われたことを考え続けていた。

ヤンが姿を消したのは、二人のところに訪れた翌日だ。傷は癒えてはおらず、動くのが精一杯だった。それでも彼は幼子を見てまなじりを下げた。

テリーとリンティアには事実だけを告げていた。ローレンシアとヒューイがどうなったか、だけを。リンティアはふらりと倒れそうになってテリーに支えられていた。そしてそのショックから立ち直ると今度は大粒の涙をぼろぼろと零していた。

「オマエらは……どうする？」

「どうするって……」

既に『アンシアン』が機能していないことはその時点でテリーにもわかっていた。この機会にリンティアと暮らしたいと思うことも無かったが、ローレンシアたちのことを聞くと今更自分たちだけというのは憚られた。

口籠ったテリーに、ヤンはふっと笑って肩を叩く。

「普通の生活をしろよ、リンティアと……それとガキとな」

「うん……」

気の無い返事のあと、ちらりとテリーの視線が幼子へと向かう。

しかしそれをヤンは「ちげーよ」と遮った。

「リンティア、言ってねえのか？」

「何を？」

きょとんとしたようにテリーが訊ね返す。リンティアは困ったように顔を伏せる。

「産むつもりなんだろう？」

ヤンの言葉にテリーの表情が止まる。どうやら何も聞かされていなかったらしい。ヤンは彼女の様子からそれを敏感に感じ取ったが、テリーはまったく疎かった。瞬きをしながらヤンと、それからリンティアを交互に見ながらテリーはやっとその意味を知って当惑していた。

その日はとりあえずは休もうという話になったあと、翌朝もうヤンはいなかった。幼子も一緒に姿を消していてリンティアはまたも涙にくれた。ヤンの思いがどうか、穏やかな方向へと向かってくれるようにと彼女は泣きながらも祈っていた。

第四十話…エピローグ

その後、エストレージャ国の政は時を経るにつれて酷くなっていた。ロサード王が私利私欲に走った結果国内は貧富の差が激しくなり、それに伴って当然のように民たちの心は荒んでいた。

情勢に異議を唱える反逆組織はぼつぼつと作られ、統合され、解散を繰り返していた。その後、エストレージャ城にそれらしい組織が奇襲をかけたという話は全く聞かない。解散した『アンシアン』のメンバーも国内に散り散りになりいまや誰がどこにいるのかもわからない。

テリーとリンティアは出産まではオフオスにいたが、生まれた女の子ごと姿を消した。ヤンと幼子も、二人のところから姿を消して以来、誰かの前に立つことはなかった。ヒューイとローレンシアの子供はヤンの手を離れてどこかに預けられたのかもしれないが、いまではもう行方を辿る人間もない。

命を懸けた彼らの戦いを、無駄な徒労と思うだろうか。途絶えてしまったかに見えた小さな思いの炎は燦りつづけ、数十年のときを経てまた燃え上がる。そのすべての源が彼らから始まったのだ。

大切なのは結果だ。しかしその結果を出すまでに信念を貫き続けた彼らの思いは、長き輪廻を繰り返して積みあがる。幾度失敗してもいい。捨てなかった信念は必ずや、実を結ぶだろう。

思いは血潮に乗って、はるか遠い過去から繋がっている。

伝えられなかった愛は、いつかめぐり廻って力となる。

生という愛に限りない感謝を。

F
i
n.

第四十話：エピローグ（後書き）

長かったと思います……読了ありがとうございます。特に携帯からお読みいただく方にはひどく読みにくかったと思います、すみません。

最初にも書きましたが当作品はスピンオフということで、本来の本篇はヒューイとローレンシアの子・ハロルドが主人公のひとりになっています。本篇に継続して出てくるキャラクターはロサード王くらいですね。相変わらずカッコ良いです。

本篇は私ひとりで作り上げた物語ではなく、複数人で書きあげるリレー小説となっておりますのでここにUPするわけにはいきませんが、web公開はしております。興味のあります方はメッセージでお問い合わせください。ちなみにタイトルは『月齢14・9』です。

本篇ではハロルドに両親の記憶はなく、ヤンやテリーたちがその後どうなったのか？については言及していません。もしかしたら、どこかでひっそりとハロルドを見守っていたかも知れません。

本当にありがとうございました。

苦手な三人称ですが、酷評含めご感想いただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232g/>

月下の王城

2010年10月8日13時56分発行